ｕｓｕａｌｌｙ　ｂｏｙ　－普通少年－

あんず飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｕｓｕａｌｌｙ　ｂｏｙ　－普通少年－

【Ｎコード】
Ｎ２３２４Ｅ

【作者名】
あんず飴

【あらすじ】
好きなもの、普通・平凡・目立たないこと。嫌いなもの、目立つこと・科学的根拠の無いもの。－そんな普通を愛する少年・勇気は、実はとても普通とは言えない特技がある。その特技とは――。　真面目じゃない能力バトルストーリー…かも？（笑

プロローグ

斉藤勇気（さいとうゆうき）　十四歳

僕はこの十四年間で

科学的根拠のない

『普通じゃない』類を

信じたことは

一度も

無い

プロローグ（後書き）

修正済

第一章：予感、そして・・・

『　ドキドキ☆七つのしつもん　～あなたの霊力はいくつ？～

・次のしつもんに○か×で答えてね！○の数であなたの霊力がわかっちゃう！？

問一　最初のしつもん。あなやは幽霊や占い、お化け、神様や超能力を信じる？

問二　次のしつもん。ときどき、誰もいないところから声が聞こえたりする？

問三　なんだかいつも、背後から気配がしたりする？

問四　金縛りにあったことがある？

問五　異世界に迷い込んだことがある？

問六　また、これらを防ぐ能力がある？

問七　最後のしつもん！　実は幽霊やお化けが見える？

・どうだったかな？　○の数が五つ～全部だった人は…大変！あなたは霊能力者かも！？神秘的な能力が秘められているかも　』

「…なにこれ？」
「だから、心理テストだって。どう？勇気は何個当てはまった？」
僕の目の前に差し出された小冊子。そこには如何にもメルヘンチックなレイアウトでこう書かれていた。

『★神秘の館★　～あなたの能力を暴き出す～』

胡散臭さもここまできたら尊敬ものだ。こんな本、誰が買うっていうんだろうか。
「はぁ…。こんなの全部当てはまるわけないでしょ？まったく、どこから調達してきたのこの本」
「Ｔｈｅ☆百円均一」
ここにいたよ。よくレジに持っていけたな。
「ほんと、勇気はこういうのダメだよな。もっと神秘を感じようぜ？そうする事で目の前の平凡が開け…」
「僕はその平凡が好きなの。あ、もうこんな時間だ。じゃあまた明日」
適当にあしらって教室の引き戸に手をかける。そして振り返り、一言。
「僕は科学的根拠の無いものなんて信じないから」

僕は今まで、科学的根拠のない「不思議」で「神秘」な「インチキ臭い」類を信じたことは一度も無い。理由は実に簡単。「普通」じゃないから。
普通じゃない奴は大抵、碌なことにならない。「平凡」「普通」「人並み」を捨てた奴は破滅するか、一握りで偉大になるかのどっちかだ。
別に偉大になりたいわけでもない僕は、決して「普通」を捨てたり

なんかしない。
普通に学校に言って、普通に友達作って、普通に人生を歩む。それが一番。うん、理想だよね。
僕は普通になるんだ。そう、普通に、「普通」に。

ふと、さっき教室で見せられた質問が頭に浮かんだ。

―――『問一　最初のしつもん。あなやは幽霊や占い、お化け、神様や超能力を信じる？』

ふん、愚問だ。信じるわけ無い。それこそ「科学的根拠のないもの」じゃない。

―――『×』

頭に冷たいものが当たった。
「ヤバ、雨だ」
小降りだけど、服がずぶ濡れになるには充分だ。スクールバッグを頭上にかざし、歩くスピードを速める。
雨がコンクリの地面を叩く音。水たまりを蹴る僕の靴音。それとは違う、人ともつかない声が聞こえた。

「…くる…い」
「くる…し…」
「くる…しい……すけ…て」

はぁ、と溜め息を零す。後ろを振り返るのも面倒。それに、こんなのはいつものことだ。相手にしてたらキリがない。
そう頭に言い聞かせ、そのまま家の方向へと歩いた。

――『問二　次のしつもん。ときどき、誰もいないところから声が聞こえたりする？』

――『〇』

それにしても今日は寒い。日が出ていればまだ温かいけど、その恵みも雨雲のせいで隠されている。
早く帰ろう。洗濯物も干しっぱなしだ、早歩きから小走りに変えようと足を上げると、背後から嫌な寒気が走った。
例えるならば、満員電車。ギリギリまで人が背後に近づいている、そんな感覚。うわ、想像したらなんだか気持ち悪いや。
しかし、ここには人は僕以外いない。なんせ夕方の住宅街だからね。しかも雨。人がいないのも当たり前といえば当たり前。
だったら、後ろにいる気配は誰のもの？
やっぱり後ろを振り返るのは面倒だ。これも慣れていないけれどいつものこと。スピードを小走りに切り替え、そのまま先を急いだ。

――『問三　なんだかいつも、背後から気配がしたりする？』

――『〇』

ふと、足を止めた。いや、『動かなくなった』の方が正しいかな。
結構早めのスピードで走っていたのに、いきなり体は動くのをやめた。
「ほんと、今日は何でこんなに多いんだ…」
そういえば、この前クラスの女子が「雨の日は変なものが集まる」とか言っていた気がする。嫌だなぁ、洗濯物濡れちゃうよ。
それでも、やっぱり声を荒げるのは億劫だ。僕が大層面倒臭がりやってわけではない。また、これもいつものことだから。
体が動かなくなってしばらく、僕の体は音を立てて地面に倒れこん

だ。どうやら体の自由がきくようになったらしい。
「あーあ、服びしょびしょ」
―――『問四　金縛りにあったことがある？』
―――『〇』
人がいないとはいえ、このまま地面に寝っ転がっているのは怪しすぎる。普通じゃない。
立ち上がろうと地面に手を付いたとき、異変に気が付いた。
「地面…濡れてない？」
気付くと同時に、さっきの声がより鮮明になって聞こえた。

「苦しいよ…　苦しいよ…」
「助けて…　お願い…」

これだけで気分は最高に悪いっていうのに、背後の悪寒と体の静止のオマケ付き。
さっきまで振っていた雨は跡形も無く消えている。大空を隠していた雲も、どこにも見当たらない。しかし、空の色はなぜかベタ塗りした様な灰色。
また連れ込まれた。何回も言うが、慣れてるわけではない。慣れるはずもない。
でも、もう驚かない。それが慣れだって？そんなの僕は認めないもんね。
だからって流石にこれはイラつくよ？コイツらのせいでびしょぬれだし、洗濯物もおそらくやり直しだし、無駄に神経もすり減った。
そんな訳で、ちょっとお説教。
「おい、いい加減にしろ！」
溜め息混じりで、めいいっぱいのムカつきを込めた。

途端、空気が戻った。背後の悪寒、変な声、体の固まりも戻る。幸い、人も通ってない。

――『問五　異世界に迷い込んだことがある？』

――『〇』

――『問六　また、これらを防ぐ能力がある？』

――『〇』

「もー、なんなんだいつも！僕に言っても何も出来ないって前に言っただろう？」

目の前に向かって大声で叫ぶ。誰に向かってだって？それは――

「楽になりたいなら自分達でなんとかしろ。僕を巻き込むな。あぁ、確実に選択やり直しだ！！」

それは――人のカタチを保ちつつ、違う生物と化している、

「お前ら、もしこんなとこ人に見られたら…あぁ、考えただけでおぞましい！僕はたちまち普通から転げ落ちるんだぞ！？」

所謂、『化け物』。

――『問七　最後のしつもん！　実は幽霊やお化けが見える？』

――『〇』

――『〇の数が五つ～全部だった人は…大変！あなたは霊能力者かも！？神秘的な能力が秘められて――』

「あぁ、分かってるさ、分かってるともさ。僕は普通じゃないよ、なんか変な能力あるよ、だからどうした！？」

…どうかするから困ってるんだよなぁ。自問自答。しょうがない、僕の問に答えてくれる人間は生憎居合わせてない。

物心ついた時から、普通が好きだった。平凡でいたかった。とにかく目立ちたくなかった。

それでも、物心ついた時かた僕はその「普通」が無かった。

…なーんてね。言っておくけど、僕はこんな非科学的な体質が自分にあるなんて全く信じてないから。

変な現象は全てストレスからくる僕の幻想。きっと僕は生まれつきストレスを過剰に溜めちゃう子供だったんだ。嗚呼、なんて可哀想な僕。それに、なんか見えてるって言ってもそんなハッキリは見えないし。聞こえるってのもちょっと煩い耳鳴り程度。うん、全部気のせいだ。

「あら、勇気？何ボケーっと突っ立ってるの」

声のした方向を向くと、そこには僕をこんな体質に生んだ張本人が立っていた。

「あんまりボーっとしてるとそのまま人生終わっちゃうわよ？」

「母さんみたいに超音速で突っ走ってもそのまま人生終わっちゃいそうだけどね」

「いいのよ、母さんは徳川家康のように太く短く生きるから。そして戦死するのよ…！」

「確か徳川家康って最期は病死だった気がするけど」

「…気のせいよ」

「ちょっとこの人、今歴史変えようとしたよ！？」

そもそも戦死するのが夢だなんて、女性にあるまじき侍魂。まぁ、この母親を女だと思ったことは一度も無いのですがね。

「で、母さんは何でこんなとこにいるの？買い物…なわけないから、さっき殺っちゃった死体でも埋めにきたの？」

「アンタは母さんを何だと思ってるの」
そりゃもう、本物も泣き喚く化け物だと思ってます。でも言わない。
僕が埋められちゃうもん。
「アンタを探しにきたのよ？まったく、帰っても家に居ないんだから」
「家に居なかっただけで探しにきてくれるなんて息子思いの母親ダネ、ボクウレシイヨ」
棒読み。
「違う違う、ちょっと知らせなきゃいけないことがあったのよ。そうじゃなきゃ、たとえ三日間音沙汰無しでも放っとくわよ」
憎しみを込めて言えばよかった。せめて警察くらいは呼んでほしい。
「用件言うわよ。また今日からしばらく留守にするから」
「ん、ああ。今回はどんくらいかかるの？」
「いつもと同じくらいじゃないかし。半年強、ってとこね」
母さんは、一年の半分は仕事で家にいない。
どんな仕事かと聞いたことがあったが、なんだか難しくてよく覚えていない。海外関係で、仕事も他国でやるとかなんとか。
僕が小さい頃は母さんもここまで多忙じゃなかったと思うけど、父さんが死んでからこんな風に忙しくなった気がする。
回想が曖昧なのは、僕は物心つく前の記憶が無いから。
父さんが死んだのは交通事故が原因で、その現場に僕も居合わせていたらしいんだけど、それも覚えていない。
事故のショックで記憶失くしている、というのが医者の判断。別に生活に支障ないから、どうでもいいんだけど。

「母さんがいないからって不規則な生活しちゃダメだからね？」
「そのセリフ、そっくりそのまま金属バッドで返すよ」
「家事サボったら、頭に蝋燭をつけた母さんがチェンソー片手に勇気そっくりの藁人形を作るわよ」
「この命に代えてもサボらないことを誓うよ」

罪状とペナルティーが割りに合わない。なんで家事を怠けた代償が命なのかは些か疑問だが、そこはこの母親だ、諦めよう。
「そうそう、美鬼も今年の春休みは帰ってこれないみたい」
「姉ちゃんも？どうせ彼氏とでも遊びに行くんだろうね。これだから最近の若者は」
「それ、十四歳の子供が言う言葉じゃないわね」
斉藤美鬼（さいとうみき）――――僕の姉貴だ。
母曰く、『鬼のように美しく育ってほしい』という願いを込めてつけたらしいが、仮にも人の名前に「鬼」はないと思う。
おかげで、姉ちゃんは割合美人に、そして母さんに勝らずとも劣らない恐ろしい女子高生に育った。厄介この上ない。
高校の寮に住んでいて、長期休暇以外家に居ないのがせめてもの救いだ。それほど怖いよ、斉藤美鬼は。
「おっと、もう行かなきゃ。じゃあ留守番よろしくね」
「母さんも体壊さないでよね。辛うじて人間なんだから」
「辛うじなくても母さんは人間なんだけど」
「はいはい、いってらっしゃい」
軽く手を振り、そのまま僕も帰路につく。そういえば母さん、濡れた僕を目の前にして傘に入れようともしなかったよね？なんて母親だ。

∞

「今日…何かが起きる…」
朝、僕はベッドの上でそう呟いていた。
窓に目をやると、昨日夜も降り続いていた雨はすっかり止み、日の光が差し込んでいた。
こんな爽やかな日に良い目覚めが出来ないわけがない。
なのに僕の体は汗でびっしょり濡れていた。まるで、ついさっきまで悪夢にうなされていたかのような。

「はぁ…気分悪い」
ベッドから下りて、洗面所に向かう。汗びっしょりで気持ち悪いけど、シャワーを浴びる時間の余裕はない。適当にタオルで拭いておこう。

それにしても、なんなんだろう、さっきの予感は。何が起きるっていうんだ？気味悪い。僕か家族に事故でも遭うっていうのか？
…阿呆らしい。やめやめ、考えるのも疲れる。こんな普通じゃないことなんて、考えても何の価値にもならない。
そう自分でキリをつけて台所に向かった。朝ごはんでも食べて、忘れよう。

「よお、勇気。なんだ？顔色悪いな、寝不足か？」
学校へ向かう途中、聞き慣れた声が聞こえた。
笹本健（ささもとけん）。僕の親友。昔、暗い奥底に沈んでいた僕を助けてくれた、恩人。
「うーん、そんなところかな」
『いやぁ、今朝なんだか変な予感しちゃってさー』なんて、とてもじゃないけど言えないよね。
「あんまり夜更かしすると肌に悪いぞ？なんせ勇気は顔が最大の武器だからな」
「何それ、嫌味？健の方が顔良いくせに。僕なんてよく見積もって中の中だよ」
本当に、健の顔はかなり良い方だ。男の僕が言うのもなんだけど、かっこいい。
スポーツも万能、勉強もそこそこ出来るし、何より明るい。健が笑うと、天気も晴れてくる気がする。「晴れ男」…ってヤツかな？
「なぁーに言ってんだ。それこそ嫌味だぞ？俺なんかより勇気の顔の方が得するんだからな？」

「なんで？」
「女顔は男にも女にもガキにも年寄りにも好かれるらしい。つまり老若男女対応可能。この前女子がゆってた」
なんだか遠まわしに「男らしくない」って言われた気がする。な、泣いてなんかないからね！？
「他にも言ってたな。確か『萌え要素的に受け…』」
「健、その続きを言ったら野口先生（体育教師、三十二歳独身　♂）に『健は先生みたいな人がタイプだそうです』って真顔で喋るよ？」
「待て！！おまっ、なんつー嘘を！」
ふぅ、健が続きを言うのをやめてくれて良かった。ちょっと荒業だったけどね。

学校に無事到着。今のところ何も起こらない。
「おっはよー、勇気。昨日はよくも話の途中で帰りやがったなー」
ぶつくさ言ってくるこの胡散くさ男は天野義人（あまのよしと）。
僕の大っっ嫌いな「科学的根拠のないもの」をこよなく愛する。まぁ、僕だてある程度の興味ならとやかく言わないけど、
「さぁ、今日も神秘について語り合おうぜ…！あ、それとも今日は校庭にミステリーサークルでも書いてみるか？」
ここまで行き過ぎていると、正直頭のネジが数十本抜けて、慌ててはめ直そうとネジを押し込んだら間違えて釘を刺し込んでいたんじゃないかと本気で思う。てゆうか、僕を巻き込むなっての。
「はい、おしゃべりタイム終了ー。ホームルーム始めるぞ」
担任の谷川先生が皆を席に着かせようと促す。
僕のクラスの担任であり、数学教師の谷川眞二（たにがわしんじ）先生。愛称『タニシ』

それから一時間が過ぎ、二時間が過ぎ――――とうとう今日の授業が終了。

本当に何も起こらなかった。いやいや、とても嬉しいんだけどね？
なんだか振り回されたみたいで悔しい。
こんな時はさっさと帰って家でゆっくりするのが一番。そうだ、早く家に帰ろう。
「あ、勇気。この心霊写真なんだけど」
「ごめん、今忙しいから」
忙しくなくてもそんなもの見ないけどね。

「はぁ…はぁ…。なんだ、やっぱち何も起こらないや」
家まで全速力で走ってきてしまった。何もこんなにスピード出すことはなかったかも。
エレベーターの中で、僕はひたすら息を整えることに集中した。
電子パネルが「6」と表示した。
ズボンのポケットから鍵を取り出し、「斉藤」という表札が掛けられているドアの鍵穴に差し込む。
いつもと変わらない、ごく普通の行動。でも、それはここまでだった。

今思えば、僕はもっと部屋に入るのを躊躇うべきだった。

ガチャリ…と音を聞き、鍵の解除を確認する。ドアを開けると、やっぱりいつもと変わらない玄関。景色も変わらない。
だけど、空気だけが、いつもと違った。
それは、以前も感じたことがある空気。「化け物」の類が近くにいる時に感じる、変な感覚。
今まで感じてきたものの比べ物にならないくらい強いそれが、玄関横の僕の部屋から発生していた。
なんだ？またあの化け物たちか？いや、でもアイツ等じゃこんな存在感は出せない。じゃあ、何？
指の震えをなんとか抑え、部屋のドアノブを握る。ギィィ…と重苦

しい音と共にドアが開き、その向こうに居たのは――――

――――女の子、だった。

黒髪に、黒い瞳。ごしっく…っていうんだっけ？そんな感じで、それでいてシンプルな黒いワンピースを身に纏っている。
程よい丈のスカートからスラリと伸びた足には、これまた黒いブーツがはめられていた。
しかし、何より息を呑むのは、格好に反して透けるように白い肌でもなく、整いつつ艶やかな雰囲気をかもし出すその容姿でもない。
背中に生えた、何もかもを飲み込むかのような闇色の翼。
彼女の身体に合わずその羽は異常に大きく、重くないのかなぁ…なんて場違いなことを考えてしまう。
歳は…十六、十七くらいかな？身長も僕より十センチ程大きく見える。―ってそんな事考えてる場合じゃないぞ、僕。
一体全体、なんで僕の部屋に女の子がいるんだ？この存在感からして、人間ではないと思う。
「お前が斉藤勇気、か？」
ふいに名前を呼ばれる。呼んだ主は、目の前の暗黒を纏う女の子だった。

「なんだ、弱っっっそうだなー。見た目まんま女の子じゃねぇか。こんなのが戦えんのかぁ？」
ケタケタと笑う翼付きの少女。あれ、案外口悪――じゃなくて！！
「ちょ、き、君誰？人間ではなさそうだけど。なんで僕の名を？」
「お、さすがにアタシがこの世のものではないってのは分かってるみたいだね」
如何にも意地の悪そうな笑みを浮かべる女の子。だから誰なんだっ

て！
「アタシは使い魔。今日からお前と共に戦い、武器となる『化け物』さ」
「使い魔…？いやいや、言ってること分かんないって。てゆうか、何？武器って？」
「お前は今日から『ハンター』となりジャンクを壊していく。いいか？」
「た、タンマタンマ！！意味が理解できません！」
「せいぜい、アタシの野望を叶えるための足となることだな。ま、よろしく頼むぜ？斉藤勇気」
……はぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！？

斉藤勇気　十四歳
僕はこの十四年間に
科学的根拠のない
「普通じゃないもの」を
信じたことは
一度も
ない
…んだけど、

どうやら
信じなければ
いけない時が
来たみたいだ……

第一章：予感、そして・・・（後書き）

修正済

第二章：使い魔

「あの・・・今なんて・・・？」

いきなり現われた女に色んな事を聞かされ混乱気味（つーか完璧混乱してた）僕は、
やっと人間らしい言葉を言うことが出来た。

「だから・・・」

「めんどくせぇ」と言わんばかりにため息をし、女は言った。

「簡単に言うぞ？お前、ハンター。化け物、操れ。ジャンク、狩れ。」

うん、すっごい簡単な説明。めっちゃくちゃ簡単。簡単な説明・・・
なんだけどさぁ！！！

「すいません・・・もう一度・・・」

「ちっ・・・もの分かりの悪い人間め・・・」

今の説明で全部理解できる奴なんていないんじゃないかな、バッキャローめ♪

「お前は、今日から、ハンター、だ。」

「うん」

「なぜなら、お前は霊や化け物を、操れる、から、だ。」

「うん」

「その能力（ちから）で、ジャンクを、狩れ。」
「うん」
「・・・こーいうことだ。」
「うん」
「分かっただろ？さすがに」
「全然」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
カーン！ゴングがなったね、試合開始☆

「『全然』じゃ、ねーだろーがぁぁあああ！！！てめぇの頭ん中どうなってんだ！！！！脳ミソ入ってねーのか！？ぁあ！？」
「こんな説明で分かるわけないでしょ！！！つーか僕の頭はいたって正常です！！！」
「てめぇの頭の事なんか知るかボケ！！！」
「じゃあ聞くな！！！！！！」
はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・カーン！第二ラウンド開始☆

「んだと！？てめぇアタシを誰だと思ってやがる！！」
「ンなの知るか！！！」
「使い魔だ！！！」

「もっと知るか！！！！！」
「いいからとっとと理解しやがれ、カス！！」
「カスとはなんだ不法侵入！！訴えるぞ！！！」
「んなもん裁判官を操ればいいこと・・・ふっ」
「威張れることじゃねぇし！！つーか操んなよ！！」
「自分のピンチを自分の能力で回避して何が悪い？」
「なんかソレっぽい事言うなぁぁああ！！！！」

ひとしきり叫んでやっと落ち着いた僕は、もう一回女に尋ねた。
「ハァ・・・ハァ・・・あなたは誰なんですか？」

「ふぅ・・・・アタシはジャンクを狩るハンターをサポートし自らを武器化する魔の者、『使い魔』だ。」
女も落ち着いたらしく、今度は真面目に答えてくれた。

「・・・・・・・・・。」
「いきなりの事で混乱したんだろうが、薄々感づいてはいただろう？霊や化け物を操れる事に。」
「・・・・・嘘だよね？」
「まだ信じてないのか？」
「霊なんているわけないじゃん・・・冗談・・・そうだ、母さんの冗談だな・・・」
「残念ながら、本当だ。」
「そうだそうだ・・・今日から僕が一人なのを思って・・・そうだろ・・・？」
「証拠ならあるぞ」
「どこにそんなもの・・・・・！！」

僕はこの現実を受け止めたくなくて必死に冗談だと思い込ませた。

しかし、そんな僕とは裏腹に女は表情ひとつ変えずに僕の額を指差した。

「お前のその包帯の下の傷。それが証拠だ」

僕には小さい頃から額に傷があった。
なんか「ハリーポッター」みたいで目立ちそうだから包帯を巻いて隠しているんだけど。

「この傷は・・・僕が小さい頃に怪我かなんかで・・・・」
「そうみせかけて、神がつけたんだ。」

神だって?何言ってるんだこの女。

「神はな・・・」
女はちょっと呆れた感じで説明し始めた。

「毎年毎年、この世の中ではたくさんの子供が生まれてくる。だいたいは「特技」を持って。しかし、たまに特技が全くない、かわいそーーな子供もいるわけだ。」
・・・・・なんかムカついてきたぞ・・・
「でな、不憫に思った神はそーゆう子供に「特技」を与えたんだ。最初はごくごく普通の・・・しかし!神はある年からつまんなくなってきて、『どうせなら☆』と、なんかもんのすごい能力を与えちゃったんだ。」
神軽いなー。
「そしたら神はまっちゃってさ〜・・・『よし☆来年からもこれで行こう!!』とか言い出したんだよ〜困っちゃうねー」

神ノリいいなー。つーか本当に神なのか？その言動からして・・・・。
「ちゃんとした神だぞ。あれでも。年老いたじーさんだ。」
「じーさんかよ！？って心読まれた！？」
「お前の顔みりゃ分かるぞ。誰でもな」
そうかなぁ・・・あれ？そういえば・・・
「おい！使い魔・・・だっけ？今の話にこの傷の説明が全然ないぞ！」
「はぁ？お前鈍いなー・・・そんなの神が特技を与えた時、『この能力で世界を騒がせたらどうしよう・・・♪』とか言って見分けがつくように子供の身体につけたに決まってんだろ」
分かるか！！しかし神若いな！じーさんだろ！！

「とりあえずこういう事だ。他に質問は？」
「えーっと・・・ジャンクって何？って事かな・・・」
「あれ？言ってなかったか？」
この女どんだけ物忘れ激しいんだ。いや、自分の考えお構いなしに言葉がでてくるのか・・・？この女ならありそうだな。うん。
「ジャンクと言うのはだな・・・ん？気配がするな・・・」
「へ？けはい？」
僕は気の抜けた声で女の言った事を繰り返した。気配？なんの？
「説明すんのもめんどうだしな。百聞は一見よりナントカって言うだろ？行くぞ！！」
一見よりってなんだ。よりって。それだと百聞のほうが一見より勝ってる感じじゃないか。しかもそこまで出てんのになんで
『しかず』が出ないもんかね。てゆーか・・・どこへ？

とりあえず女に言われるがままに行ってみると、着いたのは・・・
「・・・学校？」

中学校だった。僕がいつも通ってる。創立者がお茶好きだった事から、名前は『紅茶中学』・・・なんでやねん！！

「ここら辺にいるな・・・・」
女は辺りを見回しながら、そう呟いた。
「いるって・・・何が？」
普通の疑問。
「この話の流れで分かれっ！！この小説を無駄に長くする気かっ！！」
普通じゃない返答。
しかもなんだか危ない事言ってるよ・・・
「・・・来るぞ・・・」
「へ？」

ひゅおおおぉぉぉぉぉぉ・・・・

ん？風？・・・にしては妙な感じだな・・・僕の直感からして・・・ってまた直感！？
風の事に気をとられていたら、いつの間にか僕の目の前には女の子が立っていた。
「・・・え？」
「おい！ぼーっとするな！！」
次の瞬間・・・・・・・・・・　バシュッ！！　ドグッ・・・
「うが・・・・・！！」

何かが飛んでくるような音とともに、鈍い痛みが走った。
痛さの中目を開けて辺りを見ると、そこには僕にぶつかって来たらしい鉄パイプと・・・安西(あんざい)さん？クラスメイトの・・・割と目立たない子・・・が・・・なんで・・・

「大丈夫か？斉藤勇気・・・」
「これ・・・何・・・？」
変な日本語になりつつも、なんとか言葉を発せた。鉄パイプはお腹に命中して、かなり苦しい。
そんな中、女は少し薄笑いしながらこう言った。

「あれがジャンクだ」

第二章：使い魔（後書き）

もっと早く投稿したかった・・・（／＿；）
やっぱり小説書くのって難しいね。でもそこが好き！！（なんだコイツなんて思わないでください）

第三章：覚醒

「これが・・・ジャンク？」

鉄パイプをモロに喰らったので、息が苦しくなっている中僕は女に今一番の疑問を尋ねた。

「あぁ・・・けどこれはまだまだ成長してないから楽勝だな。」

いやいやいや、あなた今どこ見てたんですか。僕鉄パイプモロに喰らったんですよ。楽勝なんて言える状況じゃないっすよ。

「んじゃ、とっとと狩れ。」

「狩れってどうやって・・・あれ人間だよね・・・？ジャンクってもっと・・・化け物とかじゃないの？」

「お前さっきまで霊とか信じてなかったくせにそんなファンタスティックな想像してたのか。」

痛いとこつかれた！！でも普通はそんな想像するよ・・・ね？

「使い魔、ジャンクって一体何なんだ・・・？」

本当に・・・・・・何なんだ？

「コイツを狩ってから教えてやる。今はとにかく・・・」

女が喋り終わらないうちに、今度は強い風が僕達を襲った。ん・・・？風？

「さっきからなんで風が僕達に攻撃してるんだ・・・？」

「それは多分あのジャンクが『風使い』だからだろうな。」

風・・・・・使い？

「何モタモタしてんだ！！次の攻撃が来る前にさっさと狩れ！！」

「狩れって言われても！！何がなんだか・・・」

「お前は化け物使いだ。ここら辺にいる霊でも妖怪でも適当に操れ

！！」
化け物使い？僕が？そんな・・・・やり方なんて分からないのに・・・・・

「操れって言われても・・・・一体どうやってやれば・・・・・・・・」
「どうやってって・・・そうか、お前操りの能力を封印したんだな。だからそんなに能力が薄れてたのか・・・・。」
操りの能力？確かに少しは操れるなぁって自覚してたけど・・・・。
そんな思いのままにできたことなんてない。

あれ・・・？昔はどうだったけ・・・・。空中に漂う何かが・・・・はっきり見えてた・・・・。妖怪みたいなものと・・・・・・
遊んでた。そうだ・・・・・僕は・・・・・

「僕は・・・・・・化け物使いだ・・・・・・・・！！」

ドンッ！！！！！！！

今の衝撃で、包帯が粉々に砕けた。何が起きたんだ・・・？また安西さんが攻撃してきたのか・・・？
あれ・・・・？見える・・・・はっきり霊が見える・・・・。あ、なんか猫耳付けた奴もいる・・・・そいえばこいつと昔遊んだっけ。

「やーっと自覚したか斉藤勇気。そうだ、お前は幽霊や妖怪、つまり異世界の者を操れる『化け物使い』だ。お、傷も覚醒したみたいだな。」
やれやれ、という感じに笑いながら女は言った。
傷？そういえばさっきから傷痕が熱い。一体何が・・・・・・・・・・・。
「覚醒したのは良かったが、お前のその潜在的に持ってる能力じゃジャンクは狩れないからな。狩るにはこれを・・・」
そう言って、女はどこからか小瓶をだした。中に入ってるのは・・・・・飴（キャンディー）？白い・・・。

「これを舐めろってか・・・？」
僕は冗談半分で言ってみた。
「お、鋭いな。そうだ。食え！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？
「今、まさに安西さんが風を使って僕達を攻撃しようとしてるというこんな時にこの小瓶に入ってる飴を舐めろと・・・？」
「Ｙｅｓ」
・・・・・・・・・・・・・・。
「Ｙｅｓってことは・・・『はい、そうです』という事かな・・・？」
「その通り。もしくは『早く食いやがれや、この野郎』という事でもあるな。』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「ふざけんのもいい加減にしろ！！今この状況でのんびり飴なんか舐められっか！！！！！」
「ぁあ！？んだとクズ！！これは見た目はただの飴だがなぁ・・・

中身もただの飴だ！！！」
「結局ただの飴かよ！？しかもクズ言ったな今！！！！！！」
そんな言い合いをしながら安西さんの攻撃をよけるため走っていると、女はいきなり走るのを止めた。
「とにかくこのキャンディーを一粒舐めろ。今は説明してる暇がない。あのジャンク、だんだん力が増してやがる・・・」
意味がわからない。しかし、これだけは分かった。今のは冗談じゃない。
とにかく小瓶から飴を一粒取り出し、口に放り込んだ。
体が暖かくなった。光に包まれたみたいだ・・・・・。
体に・・・・力が漲る・・・・・。あれ？さっき口に入れた飴が・・・無い。口の中は空っぽだ・・・・・。
「斉藤勇気、今なら思い出せるな。」
「思い出すって・・・何を・・・？」
「化け物達の使い方だ。」
化け物達の・・・・・使い方？
・・・・・・・・・・・・分かる・・・全部分かる・・・・呪文も思い出した・・・・・・今なら・・・・出来る！！

『～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～』
気付いたら僕は、何語とも言えない言葉を発してた。
『～～～～～～～～～・・・・・霊達よ、ジャンクの動きを封じよ』
自分の意思じゃなく、頭に浮かんだ言葉を次々と言っていった。
すると、半透明な霊達が安西さんの体に巻きついて、安西さんの攻撃を封じた。
「お、攻撃やんだな。」
僕が霊を操った事は当たり前のように眺め、女はさらりとそう言った。
「この後・・・・どうすればいいんだ？」
動きを封じただけでは、狩った事にならないと思うけど・・・・・・・・。
「こーいつーの　きーずあーと　どーこっかな♪」
僕の言葉をあっさり無視して、女はもがいてる安西さんに近づいた。
「傷痕・・・・？」
「そうだ。×付きのな。」
×・・・・・・・・・・・・・？
「お、あった！！むー・・・・鎖骨のあたりかぁ・・・・生存率薄いなー」
？？？？？？？？
全く意味が分からない。
「おい、斉藤勇気。ちょっと来い！」
「う、うん」
言われるがままに言ってみると、女は安西さんの鎖骨ら辺を指で指し、

「この傷めがけて攻撃しろ。」
と言った。安西さんの鎖骨には、傷っていうより・・・刻印・・・
みたいなのが刻まれていた。女が言ってた通り×が付い
てた。あれ？でもこの×・・・・・・・・・
「元からあった刻印に重ねたみたいだって思ったろ？」
女は僕を見ながらそう言った。
「うん・・・・なんか変な感じだな・・・この×印。」
「後でそこらへんの事も説明する。とりあえず攻撃しな。」
「うん・・・・でもさ、鎖骨なんか攻撃したら安西さん・・・・・」
「多分死ぬな。」
「やっぱり怪我するよね・・・・って死ぬぅ！？」
「当たり前だろ。助かるかもしれんが・・・きわどいな。」
「そんな・・・・・」
「このままほっといて成長されるよりマシだ。そうなった暁にゃ、
国一個破壊される。」
でも・・・・・・・・・・・・・
「ジャンクに情けは無用だ。何にも出来なかったクズなんてな・・・
・」
何にも出来なかった、クズ？
「とりあえずやれ。こいつが死んでも、お前は悪くない。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
殺すなんていやだ。安西さんは・・・・確かにジャンクみたいだけ
ど・・・だからって・・・・・殺すことなんて
出来ない・・・・・・！！！！

パァァ・・・！！

光ってる・・・・・辺りが光に包まれて・・・・・・あれ？辺りが光

ってるんじゃなくて、僕の手が光ってるのか・・・・・？

「斉藤勇気・・・・お前・・・・・・」

女が呆気にとられてる。僕・・・・、何が起こったんだ？

『その手をあの子の傷痕に当ててみて・・・』

誰の声・・・・？あ、猫娘だ・・・・・・。手を・・・傷痕に・・・？

言われるがまま手を当ててみると、安西さんの傷痕の×が宙に浮かんで・・・・・・

パンッ！！

輝きながら・・・・砕けた。虚ろだった安西さんの目も元に戻って・・・・

「あれ・・・・？ここどこ・・・・」

「安西・・・・さん？」

「あれれ？斉藤君・・・・だっけ？なんでここに・・・・」

元に戻った・・・・。いつも学校で見る安西さんだ・・・・。

「あ、もうすぐ塾だ・・・・行かなきゃ。えっと・・・・バイバイ、斉藤君。」

「え・・・・あ・・・・また明日・・・・」

僕は戸惑い気味に手を振った。

「お前・・・・そんな高度な技を・・・・」

女はまだ驚いてる様子だ。僕も何が何やら・・・・

「とりあえず帰るぞ。」

「え・・・・あ、うん・・・・」

僕達は無言で家へ帰った。

帰宅後――――

「とりあえず茶ぁ持って来い」
「え・・・・なんで僕が・・・・」
「ジャンクの事、お前がさっきのジャンクにやった技がどんなにすごいかという事、すべて話してやる。」
「え・・・・・？」
「だからまず茶持って来い。」
「分かった・・・・。」
筋が通ってない気もするが・・・・まぁいいか。お茶を入れながら頭の整理をしよう。
台所で茶葉の入った缶を探しながら、僕はそう思った。

第三章：覚醒（後書き）

このお話はなんとなく書きづらかった。小説的にみれば一番大切なところなんだけど・・・；；私にとっては云わばパイプとパイプの繋ぎ目みたいな存在でした（酷っ

第四章：ジャンク

「あれ・・・？紅茶のリーフの缶がない・・・・」
そういえばこの前切らしてたんだっけ。しょうがない、麦茶を持って行くか。
硝子でできたコップに氷を入れて、麦茶を注いだ。

カラン・・・・コロン・・・・

薄暗い廊下にコップの中の麦茶と氷が揺れる音が響いた。
これから全てを知る事ができる・・・と思うと、なんだか怖い。なんだか胸が苦しくて、もう僕の部屋は目の前なのに足取りが重くなった。

ドアの前で立ち尽くす。面接の時みたいな緊張・・・いや、もっと重苦しい感じだ。面接受けた事ないからわかんないけど。
やっぱり、怖い。あまりの唐突さにさっきは信じていたけど・・・僕が化け物使いだって？冷静に考えれば馬鹿な話だ。

「やっぱり幻覚なんじゃ・・・・」
そう呟いた瞬間、ドアが勢い良く開いた。

「遅い！！！！！」

ドカッ　　バンッ！！

「・・・のやろ・・・・・いきなり開けるな・・・」
顔を思いっきりぶつけた。しかし麦茶は無事だった。余計腹がたつ・・・・。どうせならこいつにぶっ掛けてやれば良かった・・・。って殺されるか。

「なんだ、そこにいたのか」
「なんだじゃねぇよ・・・・」

嗚呼、いつも温厚な僕はどこへ行った・・・。自分の事を『僕』っていう中二男子なんて今時いないぞ・・・。そんなに温厚な僕がさっきから怒鳴ってばっかだ・・・うふふふふ・・・・。

「壊れてないでさっさと部屋入れ」
「言われなくても入るっつーの・・・」
つーかまたもや心を・・・
「顔見りゃ分かるぞ。誰だってな」
やっぱり心読んでんじゃん！！

僕は麦茶の入ったコップを「ほれ」と言って渡した。
女はまじまじと麦茶を見つめてる。あ、異世界の奴だから麦茶とか知らないのか？
怪訝そうな顔をして女は麦茶を一口飲んだ。・・・と同時に・・・・
「まずっっっ！！！！！！！」
「まず！？まず・・・い？」
「なんだこれ・・・」

「麦茶ですけど・・・・・」
「この世のものとは思えねぇな・・・」
この世のものじゃ無いのはお前だろ。と思ったが、言わないでおこう。
「おい・・・・他の持って来い」
「あいにくウチには麦茶しかありません」
「じゃあ買って来い」
「三十分ほどかかりますが、それでもよろしいのですか？」
はい、鎌かけてますが何か？
「霊でも使って言って来い。あいつ等なら三分だ」
僕はチラッと部屋に不運にも居合わせてしまった霊達を見た。と、同時に涙を零した。いえ、僕じゃありません。霊達です。そんなに嫌なのか・・・・。つーか霊達が買い物できるわけねーだろ。

「しょうがねぇ・・・・この麦・・とかいう奴で我慢してやる・・・」
麦が出て、なんで茶が出ないもんかねぇ～。記憶力が無いのか、単なる馬鹿なのか。
「・・・・・使い魔さん、なんで僕の首に縄を掛けてるんでしょうか・・・・？」
「自分の胸に手を当てて考えな」
「やっぱ読心術使えんのかよ！？」
僕の必死の謝罪で、首絞めの刑は免れた。

「じゃあ、本題に入るぞ」
女はコップを床に置いて静かに話し始めた。

「さっきも言ったが、お前らの能力は神がなんの取り柄も無い子供

等に故意的に与えたものだ。逆を返すと、なんらかの飛び出た特技がある奴はどんなに地味でも能力を与える事はできないんだ」
まぁそりゃそうだろうな・・・。
「天界の人々も、神の意見に反対しなかったしな」
そこで反対してくれれば僕はこんな事になんなかったのに！！恨むぞ、天界の人々・・・・って、これ逆恨みだな。
「ある年、神に、一人の神がこう頼んだ『俺の息子にも能力を与えてくれ』・・・と」
ん？もう一人の神？
「使い魔、そのもう一人の神ってなんだ？神は一人じゃないのか・・・？」
「んー・・・話せばややこしくなるが、神は全部で六人いるんだ」
「六人も！？」
「子供達に能力を与えた神は、全知全能で人々から『神』と言われる総合的な神だ。その他の五人は、天気やら自然やら愛やらひとつの事に関しての神だ」
「ふーん・・・分かったような分からないような・・・」
「その他にも国々で『神』と言われてる奴等もいるが、大抵神じゃなくてただの天界人だったりする」
「なんじゃそりゃ！！つーか天界って・・・？」
「そのまんま。人々が『天国』と言う場所だな。そこに住んでいる人々の事を、『天界人』と言うんだ」
「へー・・・使い魔も天界人なのか？」
「アタシは違う。また今度話すが・・・」
確かにな・・・。コイツが住んでるとしたら天界じゃなくて地獄界って感じだな・・・・・。
「話戻すぞ。それで、担当は忘れたが一人の神が自分の子供にも能力をくれと言ったんだ。しかし、その子共にはその神と同じ能力が備わっていた。しかも、それ以外でも特技は満載、顔も良いと来た」
「それじゃあ能力なんてあげれないよな・・・・って、顔の良さ関

係あるのか？」
「神はもちろん断った。しかし、なかなか諦めてくれない。何度も何度も頼みに来た」
無視ですか。そうですか。てゆーか神ばっかりで頭こんがらがって来るな～・・・
「じゃあ五人のうちの一人の神の方を『雑魚神』と呼ぶ」
またまた心読まれた！？つーか雑魚って酷いな！！
「ついに神はしつこい雑魚神に一喝した。『つーかぁマジしつこいんだけど～。ダメなもんはダメって言ってるじゃんー。もう遊んであげないんだからぁ～～！！！』ってな」
神、お前女子高生か！！一喝にもなってないし！！しかも遊んでたのかよ！！！ホントに女子学生風だな！！！！

「何度も言うが、孫もいる爺さんだぞ。神は」
「すっごく信じがたいけど・・・・」
「それでな、その言葉に怒った雑魚神は・・・・」
そりゃ怒るわな・・・・。完璧なめられてるし。
「今まで神が能力を与えてきた子供達を集め、その証の傷に×を付けたんだ」
「それがジャンクだ・・・・と？」
「その通り。×は、付けられた者の能力を暴走させ、自我をも失くさせる。つまり操り人形みたいになっちまうんだ」
「なんだそれ・・・。自分勝手にも・・・ほどがある・・・・・」
なんかムカつく・・・・ってあれ？なんで僕は無事なんだろう？ホントなら僕も×が付いてたはず・・・・
「それが、『ジャンク』と『ハンター』の違いだ」
・・・・・・？？？もう心を読まれた事なんかどうでも良くなってきた。
「『ジャンク』の意味は、クズや雑魚という意味なのは知ってるな

？」
「え、そうなの？・・・・って酷くねぇ！？勝手に×を付けられただけなのにそんな・・・・・」
僕が言い終わらないうちに、女は説明し始めた。
「由来は、雑魚な神から×を付けられたってのもあるが・・・」
雑魚神・・・・天界の皆に馬鹿にされてたのか・・・・・。
「一番重要になったのは、×を付けられるのを防いだかどうか、という事だ。」
×を・・・・防いだ？
「そうだ。雑魚神が集めた能力者、零～五歳の子供達千二百人のうち四百人は自分の能力で×を跳ね返したんだ」

第四章：ジャンク（後書き）

しばらく体調を崩してたので、更新が遅くなってしまいました・・・（―＿―；）この回は書いてて楽しかったなぁ～。神の女子高生風な発言を考えるのが大好きなんで♪次回も神のセリフを入れていきたい・・・・。

第五章：十四年前の出来事

「×を跳ね返した・・・・・・・・？」

話が難しいのと、ありえない事ばかり聞かされたのとで頭がこんがらがってきた。

「跳ね返したというより・・・・拒んだんだ、お前等は」

拒んだ？まあそんな危なっかしい刻印を付けられそうになったら誰でも拒むだろうけど・・・・。

「零から五歳の子供だぞ？そんなちっぽけな頭じゃ理解できんだろ。ましてやお前は当時零歳だったんだからな」

「・・・・ってことは十四年前に起こったのか・・・・ってまた心を・・・・」

「人から聞いた話だから詳しくは知らんが、その四百人の子供達は自分の能力を応用・・・？して雑魚神を寄せ付けもしなかったとかそうじゃないとか」

「無視かですか。しかもなんか曖昧だな」

「しょうがないだろ？その聞いた人ってのは神なんだから。ちゃんとした情報かどうか分からん。なんせあの神だし」

神頼りないっっ！

「・・・・・と、まぁこんなトコだな。んで、お前がやった技の事だが・・・・」

あの×を壊した事か・・・。あれ技だったのか。

「あの技はな、今まで『可能性はある』と言われてきたが、誰も一度も成功した事がない技なんだ」

「ふーん・・・・ってえぇ！？そんな高度な技なの！？つーか・・・

・あの変な光の技、一体なんなんだ？」
僕は何をしたのだろう・・・。とりあえず×を壊したのは間違いなさそうだ。

「あの技はな、お前の予想通り×を取り除き、壊す技なんだが・・・」
当たり前の様にまた僕の心を読んだ女は、少しため息混じりで話を続けた。
「前々から天界や魔界ではジャンクの対処法を考えていたんだ。会議や話し合いを何回も行っていた。そこでな、一人の博士が言ったんだ。『×なんて所詮とりつき、霊使いや妖怪使いの能力で剥がせないものか』ってな」
ん？魔界・・・？とりつき？
「魔界っつーのはアタシとか妖怪とかの類が住んでる場所のことだ。一口に魔界って言ってもかなり分類されるがな。とりつきってーのは、ホラ、よくこっちの世界で言うだろ？『霊にとりつかれた』って。そんな感じだ。人の体に入り込み、支配する」
「ほー。ところで、こんな風に心を読まれるのは君にとりつかれてるって事カナ？」
「博士の意見はかなり有力だった。人々はすぐに試してみた。しかしダメだった」
やっぱり無視ですか。そうですか。
「化け物達を操る様に、×も操れないか、確かに筋が通っているが、なんせ相手は雑魚でも神が付けた刻印だ。簡単には操れない」
「だろうなー・・・。んで、その大技を僕はやってのけた・・・と」
「そゆこと。だからアタシもビックリ仰天なのですよ、勇気君」
僕もビックリ仰天だ。しかも僕、操ったっていうより勝手にそうなったってゆうか・・・・・。
「お前の秘めた能力が爆発したのかもな」

「んー、そーゆーもんなのかな・・・。つーか本当の本当にお前、読心術使えんのか？」
「いや、さっきからこの霊が教えてくれてるんだ」
女はそう言って、女の隣に居る霊を指差した。
「・・・霊って人の心読めるのか。すげぇな・・・・・・人の心の呟きを勝手にバラすなそこの霊ーーーー！！！！！！！」
霊は、ビクッとなってからペコペコと必死に謝ってきた。
「あんまり責めるのもよくないぞ。コイツ、それなりにお前の事好きみたいだしな」
霊は、コクコク、と頷いてきた。
「好かれても嬉しくないし・・・つーかだったら人に教えんなよ・・・」
僕がため息をしながらそう言うと、霊は傷ついたらしく、しばらく部屋の隅でいじけていた。

「あ、そういえば使い魔・・・・・・」
「ん？なんだ？」
「使い魔って・・・・名前無いの？いや、ほら！『つかいま』って言いにくいし！！」
「・・・・・・・・・教えて欲しい？」
女は表情を変えずに僕に逆に問いだした。
「いや、教えて欲しいっていうか・・・・あの、教えたくないなら別に良いしさ！！えっと・・・」
一人で焦っていた僕に、女はクスッと笑って言った。
「『ジュエル』だ。勇気」

僕に初めて向けたジュエルの満面の笑みは、僕を馬鹿にしていただけかもしれないけど、とても綺麗でまるで宝石（ジュエル）みたいだった。

第五章：十四年前の出来事（後書き）

今回は少し短め？でもないか。とりあえず粗方の説明は終わりました～；まだ説明する事あるけど、それはまた次回・・・・・・。神のセリフ入れられなかった（；；）残念←←

第六章：キレました☆（前書き）

いつものタイトル違って、今回のタイトルはふざけた感じになりました＾＾；内容もふざけてます。←これはいつもの事だね。

第六章：キレました☆

「ん？どうした、勇気」

ジュエルの言葉でハッとした。

つい、ジュエルの笑顔に見惚れてた・・・。この人、見た目は綺麗だから・・・・・・・・。

「おい？無視か、てめぇ」

うん・・・見た目はすっごく綺麗・・・・・・・・。

「なんとか言えや、コラ！！」

見た目はきれ・・・・・・・

「うんとかすんとか言いやがれクズ！！！！」

「その見た目が台無しだぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！！！」

つい、本音が出てしまった。黙っていれば完璧なんだけどなぁ・・・いきなり大声を出されてビックリしたのか、ジュエルはしばらく固まっていた。それからしばらくして

「・・・・は？」

と間の抜けた声を出した。

「いや・・・なんか使い・・・じゃなくてジュエルってさ、見た目は綺麗なのに言葉遣いが・・・なんと言うか・・・」

「あー・・・これか」

ジュエルは状況を理解したらしく、自分の喉下に手を当てた。

「よく言われるよ。『黙ってれば完璧』って」

うあっ、さっき僕が思った事と全く一緒だ。

「これは癖みたいなもんだ。どうしようもならねぇな」

なんか普通の男より男らしいぞ、お前。

「最近の男が軟弱なだけだ」
「そこぉ！また僕の思考をチクるな！！！」
僕はさっきも僕の心の呟きをチクりやがった霊に向かって叫んだ。
「そんなに叫ぶと疲れるぞ」
「あーーーーもう！！！！！」
ムカつくーーー！！！！！でも・・・ホントに疲れた・・・・・。
「腹が減ったぞ、なんか作れ」
こんな疲れきった僕にトドメを刺しやがりますか！
「自分の家で食え！！」
「その間にジャンクやらハンターやらが襲って来たらどうする？」
「う・・・・・。つーかハンター・・・？」
ハンターって・・・・つまり僕みたいな神から能力貰った奴の事だよな・・・？なんで僕を襲ってくるんだ？

「あ、そう言えば言ってなかったな」
女は「そうだそうだ」と手を叩いた。
「あのな、一番ジャンクを狩ったハンターには神から豪華商品が出るらしいぞ？」
豪華商品！？なぜにゲーム形式！？やっぱり神軽・・・・・
「なんかな、その商品は噂だと・・・神がなんでも好きな事を叶えてくれるらしいぞ？世界征服とか・・・大金持ちとか・・・」
・・・と思ったら重っっ！！なんじゃそりゃ！！じゃあ悪い奴が一番になったら・・・・
「大惨事☆」
「☆を付けるな！！つーかそこの霊、また僕の心を！！」
「そーゆう訳で、少しでもライバルを減らそうと同業者（ハンター）を狩ろうとしてる奴等がいるのさ」
むー・・・・・・って、ハンターって狩れるのか？
「ハンターもジャンクと同じように、傷に攻撃すれば狩れるんだぞ」
「へ？じゃあ僕にも安西さんみたいな刻印あんの！？」

「・・・・気づいてなかったのか？」
「うん」
「・・・・・ホントにクズだな」
ムッ・・・・・でも本当にそんな傷痕があるのかな？
洗面所へ行って、鏡で僕の額に目を向けて見ると・・・・・あった。
なんか・・・よく漫画とかでみる『魔方陣』みたいな感じの刻印・・・・。もう傷痕じゃないな、これは。〇のなかに、色んな文字？が刻まれている。

「神はなー、こういう展開も予想してたんだ」
いつの間にか後ろに立っていたジュエルが説明し始めた。
「この能力で暴走する奴もいるんじゃないか、そう思って神は戦える能力もお前らに備えさせたんだ」
なんとなく神の思考に矛盾を感じるが・・・。危ないならそんな能力与えなきゃいいのに。
「そんな事したら、『ああ！神はなんで僕に特技を与えてくれなかったんだ・・・。神にも見捨てられた・・・もうダメだ、死のう』って奴等が出てくるだろ。つーか出た」
「そんな奴いるか・・・っていたんかい！！！」
「変な奴もいるもんだな。世界は広い」
だったら・・・・普通の『運動』とか『勉強』とかにすればいいのに・・・
「それじゃあつまらん。さっきも言っただろ」
「言われたけどさぁ！神勝手すぎるだろ！！」
「なんせ神だし」
「そんな神に支配されてる、この地球が憎い！！！」
いや、さすがにそこまでは思ってないけどさ

「とにかく・・・・なんか作るか・・・。僕もお腹空いたし」
「おう、そうしろ」
「・・・本当にここで食べてくの？」
「当たり前。つーか住む形になるな」
「はぁ・・・・って住む・・・？」
「うん。住む」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・はぃぃぃいいいいいいい！！！！？
「あれ？言ってなかったか？」
「言ってない！！全っっ然言ってない！！欠片も言ってない！！！」
「そうか。じゃあ今言ったからＯＫ☆」
「いや、『ＯＫ☆』じゃないっ！！！住むって・・・・住むって！！！！！」
凄く意味が分からない！いや、意味は分かってるんだけど・・・理解したくない！
「だいたいの使い魔はそうしてるぞー？いつジャンクが暴れるか分からんし」
そんな事言われても・・・・・
「ってことで、早く晩飯作れ」
僕は、僕の頭の中で『ブチッ』という音が鳴るのを聞いた。
「・・・・ざけんなぁぁぁあああああああーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！」

この後、僕はジュエルに飛び蹴りをかました。

返り討ちにあったのは、言うまでもないか。

第六章：キレました☆（後書き）

はい、勇気がキレました☆その時の実況・・・・

おーっと！！勇気選手、飛び蹴りをかましジュエル選手の脳天をクラーーーシュ！！！

ここでジュエル選手の怒りバロメーターＭＡＸ！！勇気選手が危ない！！

おっと、ジュエル選手何かをとりだした・・・なんと！！鎌だぁー！！どっから出したそんな物ーーー！！

ジュエル選手、遠慮なしに勇気選手を切り付ける！！この姿はまるで・・・・・ＳＯ！死神だぁぁあー！！

勇気選手、近くにあったテニスラケットで鎌を止めた！しかし鎌はラケットごと切った！！というより狩った！！何でできてるんだ、その鎌ーー！！

勇気選手危ない！危ない！あーあぁぁぁぁ・・・・

てな感じだったのですｂジュエルは死神をモーチフにして創り上げたキャラだったりします♪まんまでしょ？

第七章：夢オチ…なわけない（前書き）

☆

またまたふざけたタイトルです。内容もやっぱりふざけきってます

第七章：夢オチ…なわけない

「ふぁ・・・・・んー・・・・・」

伸びをし、辺りを見回した。

「・・・・・・・・・・あれ？」

昨日は結局ジュエルに絞められて、ジュエルの分の夕飯も作らされて、ジュエルに僕のベッドを占領されたんだよな・・・・・・。うあ、踏んだり蹴ったりだったな・・・昨日の僕。

でもなんでそんな僕がベッドで寝てるんだ？

僕はベッドを撫でてみた。もしかして・・・・・・・

「もしかして・・・昨日の事、全部夢だったんじゃ・・・・・・！！！」

そうだそうだ、きっと長ぁーい夢で、やっぱり霊とか能力とかなんてなくて、神なんていなくて、使い魔なんてのもいなくて、それでそれで・・・・・・・

「それで、なんだ？」

「それで・・・やっぱり僕は普通な人間で・・・・・って・・・・」

「はよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・ジュエル・・・さん？」
「はい？」
「これは・・・・・・・現実？」
「じゃあ抓（つね）ってやろうか」

ギュムッ

頬を抓られた。
「あれ？痛くない・・・やっぱり夢なんだ！！！！僕には能力なん
て無いんだ・・・・・・・！！！！」
「なわけない」

ギュムムムムム！！！

「いたたたたたたたた！！！痛い痛い！！！！！」
「目ぇ覚めたか？」
「やっぱり現実なんだぁ・・・・・でもなんで僕ベッドに・・・
？」
「アタシが運んどいてやった。流石に床で寝るのは可哀想だと思っ
てな。まぁついさっきの事だけど」
「可哀想だと思うんなら僕のベッドで寝るな！！！」

僕は顔を洗いに洗面所へ向かった。

やっぱり本当なんだ・・・。夢オチがせめてもの希望だったのに・・・。

『夢オチってなんか危ないこと言ってるね？』

猫耳を生やした少女が、僕に語りかけた。

「えっと・・・・・猫・・・・・・娘だよね？・・・小さい頃よく遊んだ・・・・・・」

『あ、覚えててくれたんだ？』

昨日の夕方になるまでは全く忘れてたけどね。

「君も魔界とか天界とかの人なの？」

『そーだよ？魔界の中の「キャッツタウン」に住んでるの』

「魔界の中でも色々別れてるんだ・・・・そういえばジュエルがそんな事言ってたっけ・・・・」

僕がそう呟いたときには、もう猫娘の姿はなかった。遊んでたときも、いきなりいなくなっちゃってたっけ。

顔を洗い、朝ご飯の準備をした。とりあえず、ジュエルの分も。

「おーい、朝ご飯作ったけど食べるか・・・・って、あれ？」

いない・・・・・さっきまで僕の部屋にいたのに・・・・・・・

僕の服が「ちょんちょん」と引っ張られた。振り向くと、そこには幼い男の子の霊がいた。

『あのね、羽が付いたお姉ちゃんが、「出かけてくる、朝ご飯はい

らないって伝えとけ」って』
出かける・・・・？どこへだろう？別にどこでもいいけどさ。

「今日も元気ないな？なんかあったか？勇気」
学校で、健が心配そうに僕に尋ねた。

うん、そうなんだよ、なんかあったんだよ！！使い魔っていうのが来て、安西さんと戦って、霊を操って・・・・もうハチャメチャだよ！！・・・・・・・・・・・・・なんて言えないよぉ・・・。
「なんか悩んでるんなら俺に言えよー？一人で溜め込むのは体にも悪いしさ」
「な？」と言いながら、健はニコッと笑った。嗚呼、久しぶりに聞いた労わりの言葉・・・・。健、ありがとう！
でも悩みは言えない。言ったら変人扱いされそうだし・・・。

「勇気・・・・なんかすっごく顔色悪いぞ・・・？俺、なんか変な事言ったか？」
いつの間にか僕の顔は青褪めていたらしく、健にあらぬ心配をさせてしまった。
「大丈夫、なんでもないから・・・・・・」
と言ったとき、健の視線が僕の首筋にあたった。
「勇気、ここ、どした？」
健は自分の首筋に手を当てて言った。
首筋？特に何もないと思うけど・・・・・・あ、昨日ジュエルに鎌で切られたんだ！！命に別状は無かったけど、結構深

くやられたんだよな・・・・・・血がドバドバと・・・・・・ひっ！思い出したくない！！！

「暴力でも・・・受けてんのか？」

健は厳しい顔つきで僕に言った。

「まぁ・・・・受けてるって言えば受けてるかな・・・・・・」

思わず口が滑った。

「マジで！？誰に！？親とか？」

「や、親とかじゃないから安心して！！つーか今の発言取り消しっ！！！」

「この学校の奴か？だったら俺がとっちめてやるけど・・・・」

いや、きっと君にも手が負えないと思うよ・・・・。なんせ相手は未知の生物だし・・・・。鎌とか縄とか取り出す奴だし・・・・。

「暴力って言っても！喧嘩みたいなもんだし！！大丈夫、全然平気だからさぁ！！！」

とりあえず嘘を付いた。あながち嘘でもないんだけどさぁ・・・・。

「勇気って喧嘩とかする奴じゃないよなぁ・・・？ま、平気なら良いんだけどさ」

健はまたニコッと笑って自分の席に着いた。改めて人の優しさが身に沁みる・・・・・。

放課後、教室を出ようとしたら後ろからもの凄い衝撃と痛みが走った。

「っっっったぁああーーーー！！！！！！」

「え？ゴメン、そんなに痛かった？」

後ろを振り向くとそこにはメイが居た。どうやら僕に突進したらしい。

「そんなに強くぶつかったつもりじゃなかったんだけど・・・・」

痛みの原因は、多分安西さんと戦った時の傷だ。お腹以外にも何箇

所か鉄パイプを喰らったから・・・・・。
そう言えば、安西さんは・・・・・？
僕は辺りを見回した。今日は休んでなかったと思うけど・・・。

「斉藤君・・・・」
名前を呼ばれて、前を向くとそこには安西さんが立っていた。
「あの・・・昨日の事なんだけど」
「う、うん。安西さん、ジャンクになってたからって気にする事ないと思うよ？えっと・・・とりあえず×は無くなったんだし！」
「ジャ・・・ンク？なんの事か分かんないけど、あの時私何かしてたの？」
え・・・・？覚えてないのか？あ、そう言えば正気に戻った後もそんな事言ってたっけ。
「気が付いたら斉藤君が目の前に居るし、しかもボロボロだし、私は何したか覚えてないし・・・・」
「えーーーっと・・・・・・・」
『能力使って暴れてました』なんて言えないし・・・・。
てゆーか安西さんって自分の能力に気づいてるのかな？あの時×は取れたけど傷は残ってたからまだ能力はあるんだよなぁ・・・。

「ちょっとぉー！二人で何の話ぃー？？？アタシ除け者ぉ？？」
忘れてた。メイが後ろに居たんだった。コイツに聞かれるとマズいな・・・・。
「メイ、急用があるから！ばいばい！！」
そう言って安西さんを連れて校門の外へ出た。

「・・・・私が風を使えるのは小さい頃から知ってたけど・・・」
家の方向が一緒だったので、帰りながら事情を説明した。
僕と違ってすぐに状況を理解してくれた。僕なんて今でも信じられないのに。
「私がね、風を始めて使ったのは二歳の頃なの。嵐の日に、看板が弟目掛けて飛んで来て・・・・気づいたら私は風を止めていたの」
「なんか凄いな・・・・」
「弟はその時零歳だったから覚えてなかったけど・・・弟のベビーカーを押していたお母さんはかなり驚いちゃって」
そうだよなぁ・・・・・・。自分の娘が風を操ってたらそりゃ驚くわな。
「神の落とし子だのなんだの騒いでたけど・・・その時位からかな。記憶が時々飛ぶようになったのは。最初は少しだったんだけど」
「ジャンクとして暴れてた記憶はないんだな？」
「うん・・・・。気づいたら知らない場所に居て、その場はめちゃくちゃ。親達は『障害者を授かってしまった』って絶望してた」
酷い話だ。すっごく、辛い話だ。

「・・・それで、私は『ハンター』とやらになっちゃうのかな？」
「うーん・・・でも元はジャンクだったワケだし・・・・・」
ホントのところ、どうなんだろう？

安西さんと別れて、家に着いた。ドアを開けると・・・
「おかえり」
そこにはジュエルが立っていた。
「え・・・と、ただいま・・・？」
なんとなく半疑問系になってしまった。
「ジュエルこそ戻ってたんだ？つーかどこ行ってたのさ」
「ちょっと天界へなー。神にハンターを無事確保したって伝えてき

た」
確保・・・・・。僕はなんかの事件の犯人か。
「神な、お前の事気に入ってたぞ？写真見せたら『何この子！！ちょーカワイイんですけど！！ヤバッまじかわぁ～♪一人称、
「僕」って言ってそー☆』ってな」
「やっぱり神って軽い・・・って！いつの間に写真を！？」
「だって神が欲しがるんだもん」
欲しがるからって隠し撮りかい！！
「神はカワイイ子に目がないからなー。勿論カワイイ女も好きなんだが、女顔の男も最近ハマってるそうだ」
「なんか危ないな、神・・・・・・・」
確かに僕は結構女顔だけど・・・・・。

「あ、そう言えば」
僕は安西さんの事を思い出した。ジュエルに聞いて見ると・・・・
「勿論」
と、簡潔な答えが返ってきた。
「え、じゃあ安西さんもハンターに・・・・」
「当たり前だろ。ハンターは多い方がジャンクを狩る効率が良くなる」
まぁそうだろうけど・・・・・・・。
「きっとそいつの所にも使い魔が行ってると思うぞ？」

――――――少し前の安西宅・・・・・・・
「あれ？お母さん居ないのかな・・・？」
どうも、安西さんコト安西深雪（あんざいみゆき）です。さっき斉藤君と別れて家に帰

ってきたんだけど・・・・・・。
「いつもこの時間は居るのになぁ・・・・。あれ？拓も居ない？」
弟の拓(たく)も見つからない・・・。買い物でも行ってるのかな？
私の部屋に続く階段を上っていると、部屋から人の気配が・・・・。

ガチャリ・・・・・・・・・・・・

恐る恐る部屋のドアを開けて見ると・・・・・・

「お、帰って来た帰って来た～♪」
そこには猫耳の少年・・・・って言っても私より年上らしき男の人が立っていました。十七歳位かな？
・・・・・・・・・って冷静に分析してる場合じゃないか。
「どちら様ですか・・・・・？」
「使い魔様です」
ニコリと笑った使い魔と言う人は、ゆっくりとこっちに近づいてきた。
「使い魔って事は・・・私はハンターになるんですか？」
「へ？なんで分かってんの？」
さっき斉藤君の話に出てきたし・・・・。
「・・・・・・・とりあえずそーゆう事。よろしくな、安西深雪ちゃん♪」
「猫耳・・・・・・・・・・・・・・」
「ん？あぁ、これか。・・・ってなんで震えてんの・・・？」
自分でも身体全体が震えてるのが分かりました。斉藤君の時も堪えてたけど・・・・・もう我慢できないっ！！！

「か・・・・・・・・・・」
「か？」

「かーーーーーーーーーあいいーーーー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「へ！？・・・ってうわっ！！」

私の可愛いもの好き魂が我慢できずに、使い魔さんに飛びついてしまいました。斉藤君の時も結構危なかった・・・。

「猫耳なんて萌えの基本問題と応用問題みたいなもんですーーー！！！！」
「なんか意味分かんない事言ってないで離れろ！！苦しい！！！」
「いーやーでーすーー！！ギューーーーー！！！！」
「いたたた！！力を入れて抱きつくなっっ！！！」

この後、私はまた暴走してしまった様です。あと、この使い魔さん、シャムと言う名前だそうです。
名前も可愛くて、またまた暴走しちゃいました。テヘ☆

第七章：夢オチ…なわけない（後書き）

神のセリフ出せて良かった！！あ、神はオカマじゃありませんよ？決っっして！！

深雪ちゃんも出せて良かった～。ホントはここまで出しゃばらせるつもりじゃなかったんですが・・・^^；この手が！！この手が勝手にぃぃぃぃぃ！！！（殴

因みにシャムも違うハンターの使い魔になるはずでした。でもノリで深雪ちゃんの元に・・・。これはこれで面白そうだからいいや♪

（計画性０

第八章：紅茶中学の人々

「・・・・・・・・・うん、じゃあ安西さん、使い魔に会ったんだ？へ？猫耳・・・？萌えた・・・？」

電話口から、安西さんの興奮した声が聞こえた。

「えっと・・・・よく分かんないけど分かった。じゃあまた明日、学校で・・・・・・」

ガチャリ・・・と、電話の子機を置いた。

「ジュエルー、安西さんトコに使い魔来たってよー」

僕の部屋にいるジュエルに、少し大声を出して言った。

「名前なんだってー？」

少し間を置いて、ジュエルから返事が返ってきた。

「名前・・・・確か・・・シャム？とか言ってた気が・・・・・・」

「シャム？猫か？」

「あー、猫耳生えてるとかなんとか言ってた」

羽だったり獣耳だったり・・・・使い魔ってファンタジックだな。

「猫が使い魔になったのか・・・・。明日にでも顔出すか」

「へ？知り合いなのか？」

「まーな。あ、やっぱこっちから行くの面倒だわ。勇気、お前明日猫とそのハンター連れてこい」

「なんで僕！？」

「お前の他に誰がいる？」

お前が会いに行けばいい事だろ！！！
・・・・でもいいか。僕もそのシャムって使い魔に会ってみたいし・・・・。
「勇気ー、今日の夕飯はなんだ？」
「・・・・今日もここで食べてく気っすか？」
「勿論」
「・・・・・・・・・・・・・・・シチューだよ」

――――――翌日

「・・・・・・・・・ってワケで、そのシャムと一緒にウチに来てくれって事なんだけどさ・・・・」
「別に良いよ？私もジュエルさんに会って見たいし・・・・・・じゅるり」
・・・・今『じゅるり』って聞こえたような・・・・・。気にしないことにしよう、うん。

「ゆーーーうーーーーきーーーーーー！！！！！！！！！」
後ろから何かが発射された。僕が思わずよけると、それはズザァァーっと床に転げた。
「あたたたた・・・・ひっどーーーーい！！なんでよけるのぉ～？？？」
・・・・・・メイだった。
「ご、ごめん・・・・っつーか突進してくんなって」
「最近かまってくれなくてさーーーみーーーーしーーーーいーーーーのぉぉーーーーーー！！！」
最近もなにも・・・・小さい頃はそりゃ幼馴染だし遊んだけど。数年前位からもう特にじゃれあってない。

「メイ、僕用事あるから・・・・・」
「ぶー・・・またはぐらかすぅ・・・・」
だって絡まれると厄介なんだもん!!突進されると痛いし!!!
逃げるように教室から飛び出すと、

ドンっっ!

肩に何かがぶつかった。
「あ、ゴメン・・・ってなんだ、勇気じゃん」
「『なんだ』って酷・・・・聡」
ぶつかって来たのは（僕からぶつかったのかもしんないけど）石川聡。
大の女好き。言っとくけど、タメだからな?中二で既に・・・・先が思いやられる。どうでも良いけど。
「また舟澤とイチャついてたのかー?」
「や、違うし。なんで君はそんな風にしか見えないのさ?」
「俺じゃなくても全員そーゆー風に見えてると思うけど?♪」
振返ると、教室の中に残っていた生徒の大半が「うんうん」と首を縦に振っていた。
「え、やっぱそう見えるー?アタシ嬉しいーー!!!」
メイが顔を赤らめて言った。

や、違うから!!コイツとはただの幼馴染で・・・・と言おうとした時、聡がメイに駆け寄り
「ねー舟澤、勇気なんかより断然俺の方が良いと思うんだけど・・・・どう?」
とフェロモンむんむんで囁いた。
うわー、キザだー。二年生の中坊が言うセリフじゃないな、これ。

でもメイを貰ってくれるんならありがたい事極まりない。
え？酷い？知ったことか。コイツが居ると、今みたいに普通じゃなくなる。それが僕は嫌なんだ。

「えー、石川君キザだからヤー」
メイのストレートが聡にヒット！！お前も結構ザックリいくな、メイ。
でも聡は諦めてない様子。
「勇気は良いよなー。船澤に惚れられて・・・代われよ、コンニャロー」
「代わってくれるなら代わって下さい、なんなら菓子折りもお付けします」
「勇気酷ぉーーーい！！」
「・・・・って事で、船澤俺どう？」
「ヤー！ぶー・・・・・・・・・・・」

クラスの奴等が『三角関係』だの『恐怖のトライアングル』だの『愛の奥様劇場』だの言い始めたので、僕はそそくさと教室を出た。つーか最後の『愛の奥様劇場』ってなんだ！？意味が分からん上になんか危うい感たっぷりだぞ！？

あても無く教室を出たので暫く廊下をブラブラしていると、向こうから女子が歩いてきた。
別に女子が向かって来ても全然おかしくない。むしろ普通。そう、でもこれは歩いてきたのが普通の女子だったらの話。
向かい側を歩いている女子は、造り物のみたいに綺麗で・・・・可愛いなんて言葉は似合わない。黒髪が風に靡いてる。
目は少しつり気味で・・・・って・・・

「じゅ・・・・・える？」
僕は顔を引きつらせた。なんでここに！？
「ん？お、勇気ここに居たか」
「なんで・・・・」
「やー、あんまりにも暇だったもんで」
「もんで・・・・・？」
「潜入☆」
「すなーーーー！！！！」
冷や汗ダラダラで叫ぶ僕に、ジュエルは
「あんまり叫ぶと身体に毒だぞ」
と平然と言った。お前のせいだろうが！！
「や、でも本当にあんまり叫ばない方が良いぞ？じゃないと変人扱いされるぞ」
「大声だした位で変人になって堪るか！！！」
「ただの大声じゃなくて、大声で独り言言ってる奴って変だろ？」
「話はぐらかすな！！今僕はお前に説教を・・・・・・」
「お前は今、そう見られてるはずだ」

・・・・・・・・・・・・・は？

「アタシは霊感が強い奴や使い魔持ちの奴以外には見えないんだ」
「そ、そなの？」
「だから、お前は今、傍から見れば変な人に見えるのさ」
えー・・・・・・・・・・それってヤバくね？

ヒソヒソ・・・・・あれって二組の斉藤・・・・ヒソ・・・ヒソ・・・・

うわーーーーーーーー！！！！！なんか人々の怪しい陰口が聞こえるぅぅーーーーーーーー！！！！！！

「え・・・・と、斉藤君・・・・・？」

振返ると、そこにはこの前『お友達データ』を書けと言ってきた子が目の前にいた。名前なんだっけ・・・なんて言ってる場合じゃない！！！！

「さっきから独りで大声出してるけど・・・・・・・どうしたの？」

恐る恐る聞いてきた。周りの奴等も僕の回答を苦笑いしながらジーッと待っている。

「あ・・・・えと・・・・・さ、最近ストレス堪ってたから・・・・・ば・・・爆発？」

うあーーーーーーーーーーーー！！！自分で言っててなんだこの言い訳ーーーーーーーー！！！！！こんなの言ったら逆に不振がられ・・・・・・・・・・・・・・・・・

「そっか・・・・・斉藤君も・・・・・・大変なんだね・・・・・・・！！！！！」

・・はい？

何周りの人も「うんうん」って言いながら頷いてるんですか。

「ズビビ・・・・」って、なぜ君は涙を流してるんだい？そんなに僕を哀れに思いでもしたのかいな。

や、そこの君、「分かる・・・・・分かるよ、斉藤！！！」って手を握られても困るってば。

「斉藤・・・・・・・悩み事があるみたいだな。なら・・・・先生と語り合おうじゃないか！！！！なんでも相談にのったるわぁ！！！」
先生！！なんでそんな熱くなっちゃうんですか！！！つーか皆、こんな言い訳信じるなよ！！！！！
大丈夫か、紅茶中学の生徒&教師！！！！！！！！確かに名前からして変な学校だけどさ！！

なんとか同情の渦から抜け出した僕は、また逃げるように教室に戻ってきた。
「お、勇気さっきはなんか凄かったな？」
健がやっぱりニコニコ笑いながら話しかけてきた。嗚呼、僕のせめてもの癒し！！
「やっぱ悩み事あんのか？」
健の顔から笑顔が失せ、窓の外に目をやると天気までもま雲行きが怪しくなった。
「ぜ、全然っっ！！全くもって平気！！！」
「平気じゃないだろ？」
うう・・・・まぁそうなんだけど・・・・。
「あ、よ、予鈴！！ほら、もう席着かなきゃ、な？」
「うー・・・・」と唸る健を横目に、僕は席に着いた。
だってバレて変人扱いされたくないし・・・・。健ならしないと思うけど。
でもやっぱり教えられない。普通じゃないもん。

タニシの話が終わり、下校時間。

今朝ジュエルに言われた通り安西さんと使い魔を連れて行くため、
僕は安西さんの家の前で待っていた。
「遅いなぁ・・・・・何してんのかな」
そう言ったとたん、ドアがバァン！！と開き、安西さんが出てきた。
「ゴメンね、遅くなって・・・・。シャムがなかなか行きたがらなくって・・・・・」
「俺は絶対行かねぇぞっっ！！！！」
安西さんに手を引かれ出てきたのは・・・・・・・・・・・・・
「ね・・・・・猫耳？」
「・・・・・・俺の印象はそれだけですか」
や、だってかなり印象的だし・・・・・。
「ね、可愛いでしょ？斉藤君」
安西さんがこれまでもなくイイ笑顔を見せた。
「可愛いっていうか・・・・・・凄い？」
「凄い！？」
なかなかツッコミ役の人だ。ジュエルにもツッコんでくれるかなぁ・・・・・・。
「お前の使い魔・・・・・・ジュエルだったよな？」
シャムさんが恐る恐る僕に聞いてきた。
「そう・・・・ですけど？」
「・・・・・・・・はぁ・・・・・」
ため息！？そりゃぁ・・・・あのキャラは結構濃いけど・・・・・。
「『ジュエルさん』なんて・・・・名前も可愛いのに・・・・」
安西さんの目がキラキラ光っている。すげぇ。人の目って本当に光るのか。
「も・・・・もしかしてこんな風に・・・獣耳とか付いてちゃったり・・・・・する？」
安西さん、なんでそんなに息荒いのさ。
「「アイツは翼が生えてるぞ」」
僕とシャムさんの言葉が重なった。

「つ・・・・つつつつ翼！！！！！！！・・・・・」
お、目の輝きが増した。

「あの・・・・・シャムさん？」
「『シャム』で良いぞ」
「あ、じゃあシャム・・・・。ジュエルと友達なの？」
違かったのか、シャムはめちゃくちゃ顔を引きつらせた。

シャムは顔の引きつりがまだ戻らない。お、なんかブツブツいってるぞ？

安西さんは相変わらず「翼・・・・羽・・・・・・」と目を輝かせている。

そんな二人を僕は家へと導きながら、ちょっと引き気味で見ている。

第八章：紅茶中学の人々（後書き）

今回は勇気の学校の色々と出てきましたねー。聡は前々から出そうと思っていたキャラでした＾＾女好きのマセガキ（笑　熱血先生も出そうと思ってました。勇気のおかしな行動にいちいち対応してくれる良き先生ですｂ

次回はジュエルとシャム＆安西さんのご対面です☆

第九章：祝！千人突破（前書き）

今回はあまり本編と関係ありません。前回の続きを期待していた方、本当にゴメンなさい！！

へ？「別にこんな小説期待してねぇよ」？でしょうね＾＾（笑

第九章：祝！千人突破

勇気「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・で？」

作者「うん」

勇気「や、僕が聞きたいのはそんな間抜けな阿呆みたいな相槌じゃなくてさ」

作者「勇気・・・・・・・・言うようになったね・・・・・・・」

勇気「あんたには散々苛められたからね」

作者「苛めてないよぅ。愛でてるんだよぅ」

勇気「お前の愛なんか要らないから。僕が言いたいのは、なんでいきなりこんな『作者とキャラが対談☆』みたいな形になってるのかって事だよ。しかも夕飯作ってる途中だったのにいきなり呼び出したりしてさ」

作者「あー、これねー」

勇気「うん、これ。で、なんで？」

作者「そりはねぇ・・・・・・・・なんと！この小説のアクセス数が千を突破しました！！！！！」

勇気「おお、そりゃすごいね」

作者「でしょ？もうビックリ」

勇気「うん。・・・・・・・・・・で？」

作者「千人突破記念？」

勇気「意味分からないよ」

作者「だって・・・・・・千人だよ！？百人の束が十個だよ！？十人の束が百個だよ！？」

勇気「人間を束とか個とか言うな。それで、何？」

作者「だってだって・・・・・・嬉しいじゃん！？元々は大学ノートの端っこのラクガキ小説がだよ！？だから、もっと『普通少年を知ってもらうため～～～～！！・・・・・・みたいな？」

勇気「なぜそこで半疑問になる。あー、でも理由は結構マトモじゃん」

作者「でしょ！？」

勇気「んー。で、僕は帰っていい？」

作者「！？　なんで！？君、さっきのアタシの叫びを聞いてなかったの！？」

勇気「聞いた。でもめんどい。こんなコーナー化した小説出たら僕

完璧普通じゃないもん」

作者「・・・・・・・・・・・・元々普通じゃ無いくせにぃ・・・・・・・・・・・・」

勇気「！！　おい、作者！！今僕に禁句言ったろ！！！！」

作者「へ・・・・・・！？いや、なんでもごじゃりませぬ～・・・・」

ジュエル「おい、勇気メシまだか？」

作者「お、ヒロイン登場」

勇気「あ、ジュエル・・・・こいつを例の鎌でぶった切ってくれたらすぐ作る」

ジュエル「あー、あの鎌な。ククク・・・・・・一瞬で終わらせてやる・・・・・・・・・・」

作者「へ！？何言ってんの、君達！アタシが居なくなったらこの小説終わりだヨ！？」

勇気・ジュエル「「別に困らねぇ」」

作者「や、困るでしょう！！君達は『普通少年』という小説の中で生きてるんだから！！つーか勇気！いつからジュエルみたいな口調になったの！！！」

勇気「いいじゃん、僕男だし」

作者「そうだけど！！・・・・・・・・・分かった。今日はアタシが出前とるから、取り合えず話させて」

ジュエル「よし、乗った！」

勇気「ジュ・・・・！！！・・・・・・まぁいっか。出前とるなら・・・。あ、勿論代金は作者持ちだからね？最後に『って事で代金ヨロ☆』とか言って逃げないでよね」

作者「ば・・・・バレてる！？しょうがない・・・・今回だけね」

勇気「なんなら僕達、帰っても良いんだよ？」

作者「是が非でも払わせて貰います！！！！！（こえー・・・コイツ黒くなってるよ・・・・）」

勇気「作者とジュエルの影響だね・・・・・・っと、あ、モシモシー・・・はい、『シーフードピザ』と、『チキンマヨピザ』と、『デラックスバーベキュー』ってのを・・・・あ、ジュエルも頼みたいのある？」

ジュエル「・・・・ぴざ？」

作者「そっか、ジュエルはまだ知らないんだね、ピザ。・・・・つーか勇気まで心読んでる！？」

勇気「じゃあこの『ナスとトマトと卵のピザ』と『ソーセージチーズピザ』を・・・・あ、全部Ｌサイズで」

作者「ちょ・・・・Ｌ！？しかも頼みすぎだし！！その上Ｌって・・

・Lって！！！！」

勇気「それとポテトとチキンお願いします。はい・・・はい・・・えーっと住所は・・・」

ジュエル「ぴざ・・・・・・・・・ぴざ・・・・・・・・・・」

作者「うぅ・・・その上オプションも付けてやがる・・・・あ、ジュエルはまだピザが何か考えてる・・・久しぶりにジュエルが可愛いらしく見え・・・・・・・・・・」

ジュエル「勇気、この『ツナ&ポテトピザ』ってのも頼む」

作者「・・・・ねぇぇぇぇぇ！！！！可愛く見えねぇぇぇ！！！何アッサリ頼んでんだよ！！！」

勇気「・・・・はい、二十分後ですね、はい。お願いします・・・・・」

ガチャン・・・・・

作者「うぅ・・・・。しかもアタシの好み全然聞いてないし・・・・」

勇気「どうせ全部好物だろ？今頼んだやつ」

作者「うん」

――――――お話し開始～♪

勇気「・・・・・・・・・・で、何を話せば良いのさ。ここまででも結構話したぞ？」

作者「ム・・・？もー、もむもっもー！！！」

勇気「ピザ口に入れたまま喋んないで下さい」

作者「ゴクン・・・ごめんごめん、で、質問ー」

ジュエル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

勇気「ジュエル、別にピザは変なもんじゃないからさ。いつまでも見てないで食べたら？」

ジュエル「・・・・・・・・・・・・・・パクッ・・・もぐもぐ・・・・・・・」

作者「どう？」

ジュエル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まぁまぁ・・・・・・だな」

勇気「つまり美味しい、と」

ジュエル「まぁまぁだっっ！！まだ食べれるって事だ！！！！」

作者「素直じゃないね～♪カワユイ」

ジュエル「お前は素直に質問を進めろ・・・」

作者「はいはい～・・・で、勇気君、ジュエルちゃん、君等のプロフィールをどうぞ！！」

勇気・ジュエル「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

作者「・・・へ？えーと・・・・・・・・アタシなんか変な事・・・・・・・」

勇気・ジュエル「「言った」」

作者「そんなハッキリと！！！泣いちゃうよ！？」

勇気「だって・・・・・・ねぇ？」

ジュエル「なぁ？」

作者「な・・・何？」

勇気「や、プロフィールをって言われても・・・・」

作者「なんで？」

ジュエル「アタシ等の運命はお前が握ってるワケだ。つまり、アタシ等の設定もお前が握ってるわけだ」

作者「ですねぇ・・・・」

ジュエル「だったらお前が勝手に書き出せば良いだろう。アタシ等をわざわざ呼ばずに」

勇気「なんかオチ台詞をジュエルに持ってかれた・・・・・」

作者「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あ、そっか」

勇気・ジュエル「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

作者「でも、ね!?ホラ、こうして作者とキャラが会えるなんて滅多に無いんだしさ!!!・・・って二人とも、凶器になる様な物出さない!!!」

勇気「わざわざ呼び出しやがって・・・・・・・・・」

ジュエル「つーかこの小説取り合えずジャンル『SF』だってのに・・・・・こんなコーナー作りやがって・・・・」

作者「あ、ちょ・・・・・!!その事は十分反省をしてるからっ!!!」

勇気「明日提出の課題やんなきゃなんないってのに・・・・・・・」

作者「コラッ!ジュエルそんなもの振り回さない・・・・って勇気!!あんたいつそんな物手に入れ・・・・ちょ、危な・・・・・・・・」

ピ――――――

第九章：祝！千人突破（後書き）

・・・・・・・・・はい、完璧にコメディー入りました。だって・・・・ねぇ？嬉しいじゃん！！こんな小説が・・・・！！って思うとさぁ！！！まぁ延べの人数？なので、本当に千人の方が見てくれてるワケでは無いですが・・・・・・。でもやっぱり嬉しい♪

ありがとう、皆様！！！

第十章：シャム（前書き）

本編入ります～。第八章の続きです。

第十章：シャム

「・・・・・・・・・・・もうすぐ家だけど、心の準備は良い？二人とも・・・・・」
僕は後ろで　キラキラ　ガタガタ　と、している人達に声をかけた。
「は・・・・・・はい！！！」
これは安西さん。
「う・・・・・・・・・やっぱ俺帰・・・・・グェ！？」
これはシャム・・・・・・。最後の奇声は、逃げようと踵をかえしたところ、惜しくも安西さんに襟を掴まれたらしい。
そこまでジュエルが嫌なのか・・・・・・。頷けるけど。

エレベーターに乗り込み、七階へ。
家のドアを開けると、なぜか鞭を持って玄関の前に立っていたジュエル・・・・・・・・・・・・・・・・・・。って鞭！？
「ジュエル、どした？お出迎えなんて珍し・・・・・・」
「ゴラァ！！！パシリはとっとと茶ぁでも買いにいけや、クズ！！！！」
床に鞭をパシンッと叩きつけたジュエルは、鳥肌が立つような恐ろしい顔で僕に向かってそう言った。
「はぁ・・・？パシリって・・・・・」
「すみませんすみません！！！すぐ買ってきますから叩かないで下さい！！！」
そう言ったのはシャム。どうやらさっきのジュエルの言葉は僕宛てでは無かった様だ。・・・・じゃなくてぇ！！

「冗談だ、猫。それにしても・・・・凄い驚きっぷりだな」
ジュエルは笑いを堪える様にして言った。
「・・・・てめぇ・・・・またかこのやろぉ！！！！！」
さっきひれ伏せていたシャムとは別人の様に、ジュエルに怒鳴り散らした。

パシィィーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！

ジュエルがまた鞭を床に叩き付けると、
「ぅにゃぁぁぁああ！！！！！！」
と、また床に蹲ってしまった。
「『にゃ』・・・・・・！？」
「コイツはな、鞭の音が苦手なんだ。だからコイツに事あるごとに鞭の音を浴びせてるんだ。しかも、驚くと猫語になる」
「そ・・・・・そうなんだ・・・・。でも・・・ジュエルが鞭持ってると・・・・めちゃくちゃ危険な香りが・・・・・・」
すっごいヤバい香りがプンプンするよ・・・・・。お子様には見せられない、知られたくないって感じだ。
「うぅ・・・・・・なんでお前は鞭なんかいっつも持ってるんだよぅ・・・・・」
シャムが半泣きでジュエルを睨んだ。
「しかも時々ホントに俺を叩くし・・・・・・」
叩いちゃうの！？それはもう本気でヤバいよ！！！
「だって面白いんだもん」
ジュエルはシャムの猫耳を引っ張りながらニヤニヤと言った。
「あ、そう言えば深雪は・・・・・・？」
シャムが思い出した様に呟いた。

「深雪？」
「安西深雪の事だよ・・・・・」
安西さんって『深雪』って名前なのか。
「安西さんならここに・・・・」
隣にいる安西さんを見ると、安西さん体をフルフルと震わせていた。
「は・・・・・はははは羽・・・・・・・・人形みた・・・・い・・・・・・・しかも・・・・・・・シャム・・・・・にゃ・・・・・にゃぁって・・・・・」
安西さんの口からボソボソと何か聞こえてきたが、詳しくは聞きとれない。
「ヤベェ！！！」と言ったかと思うと、シャムは安西さんを連れて外へ出てった。

シャムが勢い良く閉めたドアの音が響く。
ジュエルに「あれは・・・何？」と聞く素振りをすると、ジュエルは「さぁ？」と首を傾げて言った。

――――数分後・・・・・・・・

「私が暴走しまして・・・・・・」

と、

「これは名誉の負傷だ・・・・・・」

としか言わなかった。何があったんだろう？

「それにしても・・・・・・ジュエルさんって噂以上に綺麗ですねぇ・・・・・・・・・」

「ほぅ・・・・・」と、安西さんがうっとりため息を吐きながら言った。

「魔界でもコイツ、顔だけは良いって評判だったからな・・・・・・」

シャムが『だけは』の部分をやたら強調させて言った。つまり中身は・・・・って事だな。

「これで、会う度に俺に鞭の音聞かせたりホントに叩いたりしなければ普通に可愛いのに・・・・・・・・」

確かに・・・・・・。事あるごとに鎌とか縄なんて取り出さなければ完璧なのになぁ。

「完璧なものなんて無いんだぞ、猫、勇気」

「「なんかそれっぽい事言うな！！！！」」

僕とシャムの声が重なる。あれ？そう言えば前もこんなセリフ言った気が・・・・・・・まぁいいか。

シャムと、未だに目を輝かせながらジュエルを見つめている安西さんを僕の部屋へ招き、お茶を出した。

「わぁ・・・・・この紅茶美味しい・・・・」

安西さんが紅茶の入ったカップを指差しながら言った。

「あ、それ・・・・確かアップルティーだたかな・・・・・？僕が淹れたんだけど・・・・」
「勇気が淹れたのか？男の俺でも美味いって思えるぞ」
シャムの言葉に、少し僕は照れくささを感じた。
「確かに勇気って料理上手いよな」
ジュエルも人を褒めるのか・・・・・・。あ、ちょっと失礼か。
「いっつも母さん居なかったから・・・・・料理とか自然に慣れちゃって」
「勇気君ってお母さんも仕事してるの？」
「うん・・・・父さんが死んじゃう前からずっと」
って、『勇気』君？さっきまで『斉藤』君じゃなかったけ？ちょっと恥ずかしい感じだ。
「そっか・・・・変な事聞いてゴメンね？」
「え、別にいいよ。大した事じゃないし！！」

「そういえば、勇気のキャンディーの色って何色になったんだ？」
シャムが突然妙な事を言い出した。
「きゃんでぃー・・・・・・？」
僕は間抜けな声を出した。
「あれ？まだなのか？ってなわけ無いよなぁ・・・・深雪を狩ったんだし」
「あ、そうだそうだ」
シャムの言葉で思い出したのか、ジュエルが何かを取り出した。
「・・・・・・・あ、それ・・・・・・！！」
僕が安西さんと戦った時に食べた飴があった。
「あれ・・・・？前は白だったのに・・・・・・」
小瓶の中に入っている飴玉の色は、赤色だった。朱色・・・・紅色・・・・・ううん、やっぱり『赤』だ。
「可愛らしいキャンディー・・・・・・」

安西さんの言うとおり、絵になる様な可愛いキャンディーだ。如何にも「キャンディー」みたいな。

「これはな、舐めると自分の潜在的な能力の何倍ものパワーが得られる代物なんだ」
シャムの声が部屋に響く。
「このキャンディーを口に入れると忽ち体内に吸収され、力を発揮する」
だからあの時、口に入れたとたんに無くなったのか・・・。
「キャンディーによって得られるパワーは、時として人を殺める程、莫大なものだ」
今度はジュエルが僕に説明した。
「そして、一度舐めたならそのキャンディーが入っていた小瓶はそいつを主人とみなし、主人の性格や意思と照らし合わせた色に、中に入っているキャンディーを染める」
「つまり・・・・・僕の性格や意思は・・・・・赤色みたいなの？」
僕は頭を軽く掻いた。
「色によってそれぞれ意味を持っているんだ」
ジュエルは僕の顔を見た。
「詳しくは知らないが、確か赤は・・・・・」
「赤は？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
少し考えてから、
「いかにも『普通の飴』って感じの色だよな。『つまらん奴』って事じゃねーの？」
と、笑みを浮かべながら言った。
「なんじゃそりゃ！めちゃくちゃだ！！しかもキャンディーの事言うの遅すぎ・・・・・・」
「おい、ジュエル・・・・・そんな事言って良いのか？」

シャムがジュエルにたずねた。僕、反論途中だったのに・・・・・・。
「別にいいだろ。いつかは知るだろうし」
「いや、でも・・・・・・・」
シャムはまだ何か言いたそうだったけれど、口を閉じた。

「じゃぁそろそろ帰るね。ジュエルさんと勇気君ばいばいー」
「あ、うん。また明日学校でな」
「猫、また来いよー遊んでやるからさ」
「・・・・・・もう来ねぇぞ？」
「あはは、シャム、ジュエルの鞭は没収しとくからまた気軽に来て？親いないから二人だけだと寂しくてさ」
「わかった・・・・・・じゃあジュエルの事は頼んだ」
「没収できるんならしてみろ」
「・・・・・・ゴメン、無理っぽい」
「えぇ！？」

そんな会話をしながら、二人を見送った。

「勇気、今日の夕飯なんだ？」
「んー・・・何にしよう・・・。今日買い物行けなかったんだよなぁ・・・・」

僕は夕焼けに頬を染めたジュエルを見ながら今日の献立を考えた。
その横顔が、少し悲しげに見えた。

「マズいもん作ったら鞭でシバくからな」

・・・

第十章：シャム（後書き）

ジュエルちゃんやっちゃいました！！鞭でお仕置き！！！怖ぁ～い。
気づいたら書いてたんですよ。鞭を持ちながら玄関に立つ、笑みを
浮かべたジュエル・・・・・・

わぉ、恐ろすぃ～・・・・・・・・・・。

第十一章：記憶の声（前書き）

テスト終わりましたーーーー！！バンザーイ、バンザーイ！！！！！
これでやっと小説更新出来ます；；よし、頑張るぞぉ☆

少しながら、血などちょっと残酷な描写があります。いや、ホントにちょっとなんですけど！！；；ほとんどの人が「な～んだ、こんなもんか」とか言うと思いますが、極度に苦手な方はご注意を。

第十一章：記憶の声

――――勇気

誰？

――――普通なんて無いんだよ、勇気

誰なんだ？

――――普通な人間なんていないんだよ

何を・・・・・・

普通――――　　能力――――

不幸な事故――――

違う、事故じゃない。事故なんかじゃない。　普通じゃなかったから・・・・普通じゃ・・・・・・・・

「勇気？」

目を開けると、ジュエルが僕の顔を覗き込んでいた。

「どうした？悪い夢でも見たか？」

ふと我に帰ると僕は汗まみれだった。

「夢で・・・・・・声がした」
「声？」
誰の声だったけ？聞いた事がある声だった。あれ？そういえばあの声、なんか言ってたような・・・・・・・・・・。

「早く着替えろ、出かけるぞ」
「へ？出かけるってどこへ・・・・・・」
「ジャンクのいる場所だ」

ワケが分からない儘パジャマを着替え、朝食を作った。
「ジュエル・・・・・ジャンクのいる場所って・・・・」
「今はさっさと食え。後で話す」
なんでそんなに急ぐ必要があるんだろう？謎は深まるばかりだ。

朝食を食べ終え、とりあえず外へ出た。

「・・・・・・・で、どこに行くのさ」
もう答えてくれても良いだろう。多分ジャンクを狩りに行くんだろうけど・・・・・・。
「えーっと・・・・・あ、あったあった」
何か紙を取り出したジュエルは、それを読み上げた。

「『ハンター・斉藤勇気　使い魔・ジュエル
お前達の近辺にジャンクが発見された。ただちに狩って来い。
ジャンクのレベル、一　ジャンクの能力、水使い』」

「・・・・・・・・は？」
僕の口から間抜けな声が零れた。
「『発見された場所、ショッピングビルディング「プラス」内
また、かなり×に取り込まれているため、辛うじてまだレベル一だが成長する恐れ有り。
健等を祈る。』」

ジュエルは一通り読み上げふぅ・・・と息着いた。そしてまた読み始めた。
「『追伸　あそこのシュークリームマジ美味いんだけど！！買ってきてぇ～♪』」
「おいっ！！！」
「どした？勇気」
「『どした』じゃなくて！なんだ、最後のふざけた追伸は！！また神か！！？」
「違うぞ。これは天界の中で神々の次にお偉い大総統様直筆の手紙だ」
なんであちらのお偉い様方は皆軽いんですか！？ホントに大丈夫かよ、この世の中。

「ジャンクに出会う確立なんて奇跡に近いからな。ジャンクの居場所が発見されたら一番近くに居るハンター達に知らされる様になってるんだ。便利だろ？」
「はぁ・・・・・・・。まぁ便利っちゃ便利ですけど・・・・」
別に僕らが狩らなくても良いんじゃないのかな？面倒臭いし、危険だし。
「そんな勢いじゃとても優勝できないだろ？」
「・・・・・・・・・今度はどいつだ・・・・・どの霊がチクリやがった・・・？」

「化け物操り者なんだからその位自分で防げ。まだまだ甘いな」
あ、そっか。でも常に操るのって大変そうだな・・・・。別に防がなくても良いか。

「じゃ、行くか」
「ジュエル、行き方分かるの？」
「地図も同封されてたからな」
「どんくらいかかりそう？」
「そうだな・・・・この位なら飛べば五分ちょいで着く」
飛・・・・

当たり前は出来ないんだよ？
つーかホントに飛ぶのか！！！！！！
「・・・・・何ボーッとしてるんだ？急げ」
「この状況で呆気にとられない人ってどれ位いるのでしょうか？」
「お前も出来るだろう？早くやれ」
やれって言われても！
「操って霊の力を取り込むんだ。霊が浮ける能力を使えば誰でも浮ける」
浮くのは誰でも出来るのでしょうが、例を操るのは誰でも出来ないのでは無いのでしょうか？

ツッコミたい事はまだまだあったけど、きりがないので取り合えずジュエルの言う通りにやってみた。
えー・・・っと、操りながら力を取り込む・・・・・

あって・・・・・・・。

「そろそろ取り込めただろ。じゃあ飛べ」
またもやこのお方は無茶な事を仰る。
「はぁ？」
「いいから浮け！」
「そんなぁ・・・・・・・って、うわ・・・・わわわっ！！！」
ふわふわと地面が離れて行く。バランスを崩して倒れそうになったけれど、地面にはぶつからなかった。空中で体が留まっている。

僕等は飛びながらショッピングビルディング「プラス」に向かった。こんな事して人に見られたらどうするか、と聞いて見たが、
「どうせ人間共には鳥とかにしか見えないだろ。もし正確にアタシ達を見たとしても、誰もそんなの信じやしないだろうしな」と言って、顔色すら変えなかった。僕は心配でならないのに。

「ジュエル・・・」
「ん？」
「ジュエルも僕みたいに霊使えてたけど・・・・魔界とかの人って皆そういう能力あるの？」
「皆ってわけじゃないぞ。アタシ等もな、一人一人違う能力が備わっていて、使い魔は同じ能力を持っているハンターの下へ行くんだ」
「そうだったの？じゃあシャムも・・・・・」
「深雪と同じ、風使いってこったな」
へー・・・・・・。シャムもそんな凄い能力持ってたのか。つーかジュエル、いつから安西さんの事を「深雪」って呼ぶようになったん

だろう？ま、ジュエルが「安西さん」なんて言ってたら気持ち悪いけどね。

「あそこだな」
ジュエルの指差した方向には、「プラス」と大きく描かれた看板が飾ってあるショッピングセンターがあった。
「あそこかぁ・・・。あれ？でもなんか静かだな・・・・・」
ジャンクがいるならもっと騒がしいはずなのに・・・。
「いっつも暴れまわってたら人間（えもの）が来ないだろ。少し学習してるみてーだな、あのジャンク」
「あ、そっか・・・。でもさ、なんでジャンクって人間を傷つけたりするの？これも雑魚神の意思？」
「まーそんなトコだな。ジャンクに付いている×はそれぞれ付けた奴の意思に反応し、それが×の意思となる。つまり人間と限らず色んな生物を滅ぼすようになってるんだ」
酷い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。そんな自分の都合だけで・・・・・・。
「・・・・・・・とりあえず、この世のジャンクを全部お前が助けてやれ。そうすれば死人は出ない、優勝する、で一挙両得☆」
「最後のやつがなんか自分のためっぽいぞ！？しかもなんでそんなに優勝したがるかなぁ・・・・」
「だってなんでも叶えてもらえる特典があるんだぞ？お前は望みとか無いのか？」
「別に・・・・」
「夢が無いなー」
「うるさいなぁ・・・・」
僕は普通に生きたい。それを神に叶えてもらっても、普通じゃない手段で普通に過ごしてる事になる。あー、ややこい！とにかく普通のがする事じゃない。異常だ。

でも・・・・・・・ホントになんでも叶えてもらえるのかなぁ？だったら・・・・・・・・・・・・・

「ジュエル？」

「ん？」

「あのさ・・・・・、その・・・なんでも叶えてくれるって・・・・・・・・」

「よし、ここで降りるか」

「えっと・・・・・って降りる！？どうやって・・・」

「てきとーに」

「適当！？無理無理！！バランスが・・・・うわぁ！！！！！！」

間一髪、コンクリートスレスレのところで止まった。というより、僕の心のコントロールで動くから、落ちる事は無いらしい。ジュエルが言っていた。

ジュエルに「なんでも叶えてもらえる特典」について聞きそびれた・・・・・。また後で聞くか。

「普通に人いるね・・・・・」

「だな。マズイ・・・・このままじゃ被害が大きく・・・・・・・・・・・・・」

ガシャーーーーン・

・・・パリ・・・・バキバキバキ！！！

そんな音と、周りの人の悲鳴が聞こえた。

「ジャンクが暴れ・・・・・・！？」

ズガ・・・

・・・

・・・

・・・・・・・・・・・・」
僕と同じ？何が？僕は僕自身に尋ねるように心で呟いた。
ジュエルからキャンディーを引っ手繰ったらしい。僕の手の中には赤い飴玉の入った小瓶があった。
「おま・・・・・・勇気！！！」

後ろでジュエルが叫んでいる。

僕の足は、ショッピングビルディング「プラス」内へと向かっていた。

第十一章：記憶の声（後書き）

う～む・・・久しぶりの執筆なんで少し感覚が鈍ってます；；早く戻さねば・・・！！

今回は少しシリアスめ？でした。勇気が普通を求める本当の理由、そして過去に何があったのか・・・・・みたいな事に繋がっていきます。まだ先の事ですがね。気長にお付き合い下さいませ～

第十二章：水（前書き）

少しグロテスク・・・・・でもないか。まぁそんな感じの表現が有ったり無かったりします。ほんとーーっに苦手な方は、読むのをお控え下さい。

第十二章：水

お客さんは全員外に逃げたらしく、建物内は静かだった。
アナウンスや曲も聞こえないところから、放送室も被害を受けたんだろう。

とりあえずジャンクを探さなきゃ。でもどこにいるんだろう？闇雲に動いても危ないし・・・・・・。

チョンチョン

服の裾が引っ張られた。目を下にやると、そこには小さい女の子の霊がいた。
『あのね、ここをね、こーんなにしちゃったおねえちゃんのことさがしてるの？』
ジャンクは女の子だったのか・・・・・・。
『だったらね、のぞみね、しってるよ？』
「へ？知ってる・・・・・の？」
『こっちー』
服の裾を強めに引っ張りながら、女の子は僕を導いた。

着いた所は・・・・・・

『ここにね、お姉ちゃんね、いるよ』
「あ・・・・・ありがとう・・・・・」
女の子はにこっと僕に笑って見せた。

一歩足を出した途端、バリバリという音と、何かに引っ張られる衝撃がした。

「いてて・・・・・・・」
引っ張られた方向を見ると、さっきの女の子の霊が僕の腕を掴んでいた。
そして音の方向を見ると・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・

・・・意思をちゃんともっているというか・・・・。
これが×に取り込まれたジャンク・・・・・なのかな。

「僕は・・・・・・・・・・・ハンターだけど、君を狩りに来たんじゃないよ」
僕は、君を助けに来た。
「・・・・・今まで来たハンターは、皆私に勝てなかった。逃げていった。または・・・逆に私が狩った」
「・・・・・・・・・・・

じゅう・・・・・・・・・じゅう

うメリメリうううううう・・・・・・

「な、何だ、この音・・・・・」

「う・・・・・・・ぐぐ・・・・・・・がっ・・・・・・・・・」

変な音と共に、唸り声が響いた。

「ま・・・・・・・・さか・・・・！！！！」

近寄ろうとすると、水の壁が現われた。

『あのおねえちゃん、くるしがってる』

女の子の霊が僕の指を掴んだ。

『こころのなかでね、くるしいよぉ・・・いやだよぉ・・・・・って』

「そう・・・・・・・か。そうなのか・・・・・・・・・」

嫌だよな。そりゃ嫌だよな。分かるよ。君は悪くない。

「君は・・・・・・・・・・・・・・・・・悪くない」

僕はキャンディーを口に含んだ。キャンディーはすぅ・・・と溶ける様に無くなり、体が熱くなった。

確かキャンディー一個につき、一回の能力しか使えないってジュエル達が言っていた。

最低、瓶の中に一個はキャンディーを残しておかなきゃならないとも言っていた。今中に入っているのは・・・・十二個。

あれ？前見た時より増えてる・・・・？って、今はそんな事気にしてる場合じゃない。

「わた・・・・わたしは・・・・・神・・・に・・・・いた・・・・

頂いた・・・・・・・・しる・・・・し・・・・・・・で・・・・・・・・・人・・・・を・・・・・・・・・滅・・・・・ぼす」

ボコ・・・・・・

ボコボコ・・・・ボコボコボコボコ・・・・

ジャンクの右腕から黒い靄が次々と出て、辺りは闇に包まれた。

「ば・・・・×に取り込まれ・・・・・！？」

僕が呟いた途端、僕の足に水が絡んできた。

「何これ・・・・・？動けな・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前ヲ・・・・・倒しテ・・・・・・・・・・ほろ・・・・・ほろ・・・・・・・滅ボ・・・・・・・・」

次々と水が体に絡み、僕は身動きがとれなくなった。

『～～～

「火玉」』

その瞬間、ポンッと赤い服に燃えるような真っ赤な髪・瞳をした男の人が現われた。

『ここ地上か？・・・・・・・・・・って勇気じゃねーか！！！！何年ぶりだ！？やー、懐かしい懐かしい～♪』

「えーっと・・・・・火玉・・・・だよね？小さい頃だったから記憶がおぼろげなんだけど」

小さい頃、よく色んな話しをしてくれた火玉。赤い瞳と赤い髪は今でも変わんない・・・・・・。

『なになに～？地獄でも噂は聞いてるよー。なんかジャンク？だっけかが暴れてるんだって？大変だねー』

・・・・・・・・うん、こんな感じだった。めちゃくちゃ能天気だったよ、この人。今まさにその現場なんですが。

『んで？俺に何のようさ～』

「そのジャンクが今ここにいるのよ」

『へー・・・・・・ってえぇ！？』

「とりあえずこの水をどうにかして・・・・」

『お、水は得意であり苦手な分野だな～。ま、降りかかって来ない水程弱いものは無いが』

火玉は自分の手の平に炎を宿して、それを水に近付けた。すると、みるみるうちに水は蒸発していった。

『それにしても地上にしては暗いな・・・・ここ』

そう言うと、火玉は手の平の炎を分裂させ、辺りを赤く光らせた。

これで辺りが見える様になったけど・・・・・・ジャンクはどこに？辺りを見回すと、何かが近づいてくる気配を感じた。そして、火玉が灯した炎が「じゅ」という音と共に消えた。

『うわっ！水モロに喰らった～・・・・だから水は嫌なんだよー』

「水・・・・・って事は近くに・・・・・・・・・・」
「私・・・・・私ハ・・・・・・・憎・・・・・イ・・・・・・・・・・

「う・・・・・・あ・・・・・・・嫌だ・・・・・・・・イヤ・・・・・・ダ・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「大丈夫。君は化け物なんかじゃない。人間だよ」

化け物？人間？意味は分かるけど、何がどうなってるのか理解出来ない。

自分の言葉に理解出来なくなったのはこれで何回目だろう？

僕は、ジャンクの腕に手をかざした。

大丈夫、君は怖くなんかない・・・・・・・・・・・・。

パァァァァァァァァァ・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・

壊れた。

第十二章：水（後書き）

今回もシリアスめですね。
ちょっと明るくさせようと、急遽『火玉』を登場させたんですが・・・・・・・・・・・・。うーむ・・・・・・・；；効果はあんまり無い様子。次回はおもしろおかしくしよーっと（笑

第十三章：荒らしの後に・・・

私は化け物だ。

どうせ私は化け物だ。

そんなの分かってる。

何人の人を傷つけたか分からない。

殺めてしまった人もいたかもしれない。

もう・・・・・・・戻れない。

しょうがないよ、私は化け物なんだもん。

化け物は、人間じゃない。

「君は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・悪くない」

あなたは誰？なんでそんな事を・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・君は辛かったんだね」

やめて・・・・・それ以上言わないで・・・・もう諦めてるんだから・・・・・・・・・・・・・・

「大丈夫。君は化け物なんかじゃない。人間だよ」

諦・・・・め・・・・・て・・・・・

包帯の男の子の視線が赤い人から私に変わった。
「う、ううん！！え・・・と、あの、その・・・・・」
「怪我はない？」
「お、ここ切れてるぞ？俺の目と同じ真っ赤な血で染まってんなー」
赤い人はケラケラと笑いながら私の腕を掴んだ。
「笑い事じゃないでしょ、火玉・・・・・。えーっと、なんか巻ける物は・・・・」
包帯の男の子は、そう言って辺りを探り始めた。
「あの、こんなの大丈夫だから！それより・・・・・」
「大丈夫じゃないでしょ？そんな血が出てたら・・・・・。火玉、その子見てて。僕布みたいの探してくるから」
「おー。あ、じゃあコイツ連れてけば？なんか此処の事詳しいっぽいし」
赤い人が指差した先を見ると・・・・・・・・・・・・・・何も無いんですけど？
「あ、さっきの女の子の・・・・・・じゃあ案内してくれる？・・・・・・・うん、ありがと」
包帯の男の子も普通に会話しちゃってるし！女の子って・・・・ホントに誰もいないんですが。

「お前大丈夫かー？さっきから全然血、止まってねーじゃん」
赤い人・・・・『火玉』って言ってたっけ。火玉さんが私を見下ろす。
「あ、本当に大丈夫だから・・・・・・。あの、さっき包帯の男の子が話しかけてたのって何なんですか・・・？」
「霊」
嘘をついた様子も無く、さらりと言われた。
「れ・・・・・！！！？」
「ちっせー女の子の。地縛霊だったけど、もうすぐ成仏出来そうだ

な」
「れ・・・・れれれれれ」
私の身体から血がひいていくのが分かった。
「おい、なんか顔青いぞ？やっぱ血がヤバいんじゃ・・・・」
絶対そっちじゃない！！や、それも理由なのかな？でも、九割はそれが理由じゃない。
「霊・・・・・・って・・・・・・・ゆ、幽霊・・・・・？」
「それ以外で『霊』って何があるんだよ？」
赤い人は苦笑いをした。
「で・・・・・・・ですよね・・・・・・・

っと私のせいだ。
それに、包帯の男の子と戦った覚えもある。謝んなきゃ・・・

「つまり、私のこの化け物みたいな能力は、神がくれたものって事？それで、雑魚な神が×を付けた・・・・」
「まぁ、そーゆー事になるね」
「・・・・

な」
「火玉、あの女子学生風の神は別に悪くないんじゃ・・・・？確かに僕等に能力を与えやがったけど」
「俺はアイツが嫌いだからな。何もかも神のせいにしてやる」
酷っっっ！！！！！ま、僕も多少あれのせいでこうなったんだと思ってるけどね。
「話それちゃったけど、とりあえず火玉の言うとおり君が悪いわけじゃないんだし、気にしなくていいよ」
「で、でも・・・・・・・・・・・・」
「よし、応急処置終わり！結構キツク縛ったから痛いかもしんないけど」
「あ、ありがとう・・・・・・」
「どういたしまして」
僕は女の子の顔を覗きこんでニコッと笑った。
「う・・・・・うわぁぁあーーーーーーーーーーーーーーーん！！！！！！！！！！」
女の子は崩れるように泣きだした。
「おお、号泣とはこの事だな」
「火玉・・・・・・・・・・・」
「それにしても、お前女らしくなったなー。女々しいとかそういう意味じゃなくて」
何それ！？全然嬉しくない！！！！！
「小さい頃から女顔だったけどなー。なんか今は子供をあやすお母さんみたいだぞ？」
「ははは・・・・・それ、嫌がらせで言ってるの？」
「いや、褒めてんの」
「ありがとう・・・・・・全然嬉しくない」
「だろうな。それを狙って言ったんだから」
「結局嫌がらせかよ！？」
火玉はケラケラと笑いながらスゥっと消えた。どうやら帰っていっ

たらしい。

「泣きやんだ？」

「う・・・・・・ん」

女の子は手で涙を拭いた。

「じゃあここから出ようか？」

僕はまた女の子が泣きださない様に、なるべく優しい笑顔でそう言った。

「・・・・・・

居たのは・・・・・・・・
「あ、居た！！！」
僕はジュエルに駆け寄った。
気を失っているらしく、ジュエルは脇腹を押さえながら目を閉じている。
僕は、そこら辺にいた適当の霊を集めた。
「あ、おじさんは　ジュエルの足を支えて。君は背中頑張って。あ、あと・・・・・」
霊達にジュエルの身体を支えさせて、家に運んでいってもらった。

走って建物内に戻り、女の子の手を引いてまた外に出た。
でもなんでだろう？さっきよりもっと顔が真っ赤に・・・・・・・・。
「ここからの帰り道分かる？」
「えーっと・・・・・・た、たぶん・・・・・」
「心細いなら・・・・・あ、さっきの女の子の・・・のぞみちゃんだっけ？・・・・・・・・・うん、この子の家まで連れてってあげて」
僕は、ずっとそばに居てくれていた女の子の霊に話しかけた。
「あの、何とお話しを・・・・・・・・」
女の子はおずおずと僕に尋ねた。そっか、他の人には見えないんだ。
「まさか・・・・・・霊？」
「うん、そうだよ？」
「ひっ」と声をだしたまま、女の子は動かなくなってしまった。別に害は無いのに。普通じゃないけど。
「じゃあ、この霊にお願いしたから」
女の子の体はふんわりと浮かびあがった。
「え！？え、えぇ！？」
「霊に君の家まで送り届けるよう言っておいたから」
地縛霊だったけど、簡単に操れた。まあ地獄の者を地上に来させられる位だし当然なのかな。

・・・・・・って僕の中の「当然」が「普通」じゃ無くなってる！！！危険信号だ！！！！！！！！

「じゃ、落ちないようにね」
「えっと、その前に・・・・・・・・・・」
女の子はまた顔を赤らめた。
「私は奈緒。赤城奈緒（あかぎなお）。貴方は・・・？」
「僕？勇気だよ」
「ゆ、勇気君・・・・・・・・・・・・・・・かっこいい名前・・・・・」
ん？最後らへんでなんかボソボソ聞こえたぞ？聞き取れなかったけど・・・・・。
「ゆ、勇気君、ありがとう！！！」
「いえいえ、じゃあ奈緒ちゃんも頑張ってね」
「へ？頑張るってぇぇぇ

「病院とか連れてかなくて良いのかなぁ」
あ、でも他の人に見えないからダメか。
「ん・・・・・・・・」
ジュエルの目元が動いた。
「ジュエル・・・・？」
「ゆ・・・・うき・・・・・・・いつつ・・・・・」
「無理して起きない方が良いよ。傷、浅かったけど結構血でてたし」
そんな僕の優しい忠告を無視し、ジュエルは躊躇いもなく起き上がった。
「アタシとした事が油断したな・・・・・・・・・で？お前はあのジャンク狩ったわけ？」
なんかムカつくなぁ・・・・・。
「狩ったっつーか・・・・・前みたいに×を壊した」
「ま、それはどうでも良い」
どうでも良いって！！酷すぎ！！！
「お前、アタシからキャンディーをひったくった時、なんて言った？」
「え？」
なんて言ったっけ・・・・・。確か・・・・
「確か・・・・あの時から僕、自分でも思って無い事を言っちゃってたんだ・・・・・」
「・・・・・・・・つまり、よく覚えてない・・・と？」
「う、うん・・・・・・・・・・・・」
しばらくジュエルは黙り込み、何かを考えていた。
「・・・・・ま、来る時は来るし、考えても無駄だよな」
「へ？何か言ったか？」
「んあ、別に。それより勇気、腹減った。飯作れ」
人が下手に出れば・・・・・ぶん殴りてぇ！！！！！
でもそんな事したら返り討ちだな。うん。

僕は無駄な抵抗をせず、夕食を作りに台所へ向かった。

『勇気、お前は人間だ。化け物なんかじゃない』

「・・・・・・・・へ？」

そんな声が、した様な気がした。
でも聞こえるのはさっき振り出した雨の音だけ。

「勇気、三十分以内に作れよー」
「そんな無茶な・・・・・はいはい、分かりましたよ」

第十三章：荒らしの後に・・・（後書き）

勇気のモテモテフラグです（笑
私は基本的ハーレム好きなんで、これからも色んな女の子に勇気の魅力をとことん押し付けます！（ぇ

とりあえず勇気の謎に触れちゃったよ編は終了です。なんか重かったから、次は軽いのにするかー。

第十四章：土曜日の午後（前書き）

趣味に走りました。それだけです。

第十四章：土曜日の午後

ハロー！深雪なのです！！
今日は土曜日、つまり休日。
なので、只今家で、シャムと遊んでいるのー。
へ？どんな遊びかって？フフフ・・・・それはね・・・・・・・・・・。

「ちょ、み、深雪！おおお落ち着けって！！」
「落ち着いて無いのはシャムだよぉ？フフフ、大人しくこれを着なさい～」
「だーかーらー！そんな服着れねぇっつってんだ！！」
「えー、絶対似合うよー？シャムのために作ったのにぃ・・・・」

私はしょぼん、と俯いた。演技だけど。

「あのな、俺のために作ってくれたのは嬉しいぞ？でもな・・・・」
「嬉しいなら着てー」
「だからっ！！！なんで俺のために作った服がメイド服なんだよ！！！！！」

冒頭の訂正。シャムと遊んでいるの所、間違いでした。
シャムでが正しいです。

「『で』ってなんだ！『で』って！！！」
「あれ？シャムなんで分かってるの？読心術？」
「なんとなくだっ！」
使い魔って凄いなー。読心術も使えるんだぁ。今度の同人誌のネタはそれで行こうっと。

「ちょい待てぇ！！なんだ、ネタって！つーかお前同人雑誌描いてたのか！？」
「ふふふー」
「笑ってごまかすな！！！」
細かいとこ煩いなぁ。
「・・・て、事でシャム、覚悟ー！！！」
「う、わぁぁぁ！！！！ちょ、せめて脱がせるな！！俺が自分で着替える！！！」
「ほんとぉ？」
「ほ、本当だから、俺の服の裾を掴んでるその手を離せ・・・・」
「言っとくけど、途中で逃げ出したらジュエルさん（鞭所持）を呼ぶからねぇ？」
「卑怯だ！！！」
ま、どのみちシャムがメイド姿になったらジュエルさん呼んで一緒に笑う気なんだけどね。
ついでに勇気君にも来て貰って、メイドになってもらおうかな？うん、似合うね、絶対。
「呼ぶんかぃ！じゃあ意味ねーじゃん。俺は逃げる」
「そしたら神様に言いつけるー」
「神？・・・・・ってあの神か！？それはやめろ、っつーかお前どうやって言いつける気だ！！」
「私と神ちゃんはメル友なのー」
この前私宛に手紙が届いて、そこに神様のメールアドレス載ってたんだよね。てゆーかナチュラルに心読まれた？
「何考えてやがるんだ、あの変態ジジィ！」
「なんかね、使い魔の様子とか、ジャンク狩りの進み具合とか、最新ファッションとか教えてもらうためにハンター全員に教えてるんだってー」
「絶対最後のやつが最大の理由だろ！！」
それは私も思うー。神っておちゃめなんだね。世の中が不安だなぁ。

「ま、そーゆー事だから、潔く諦めてメイドちゃまになれー」
「メイドちゃまってなんだよ！？あーもう、分かった！ジュエルとか呼ばないなら着てやるから！！」
「やたー！」
「その代わり・・・・・・・」
へ？代わり？
「お前も着るんだぞ？」
「どうだ！」と言わんばかりにニヤリと笑うシャム。
・・・・・まったくもう、この子は本当に阿呆だなぁ。
「別に良いよぉ？」
「へ？」
シャムが間抜けな声を出す。
「着ても良いよぉ？」
「・・・・・お前、普通は嫌がらないか？」
「だってメイド服なんて数え切れない程着てるもん。しかもそれで町も歩いたもん」
「・・・・・え、マジ？」
「私を誰だと思ってるの！レイヤーの姫、深雪ちゃんだよ！？」
あ、『レイヤー』ってのは『コスプレイヤー』の事なのです。コスプレする人の事を言うのー。
「ツッコミたい所は沢山あるんだが・・・・・・・そうか、だからか」
「へ？」
やけに素直に納得するシャム。
「だからお前の部屋には如何にもアニメキャラが着てそうな服を着飾ったトルソーが置いてあるのか」
「いえーす」
「なるほどな・・・・・・・。あばよっ！！」
「まてーい」

逃げようとしたシャムの首を鷲掴みする。
「さっき言ったよねぇ～？私が着ればシャムも着るって」
「それは・・・・・なんだ、その・・・・・・・・」
「問答無用ーーーー」
「うあー！！だから脱がすなって！！！！」
もう、わがままなんだからぁ。
「しょうがないなぁ、じゃあ外に出ててあげるから、ちゃんと着替えるんだよ？」
「しょうがないってお前・・・・・・・」
ブツブツ言ってるけど気にしな～い。
ま、逃げないよね。だって逃げたら神とジュエルさんの刑だもん。

――――十分後

「ねー、まだぁー？」
「ちょ、開けるなよ！？これ着るの結構難しいんだから・・・・・・・」
シャムちゃん焦ってるー。かーわい～。
「だから着せたげるって言ったのにぃ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・お忘れの様ですか、俺は男です」
「初耳だねぇ～」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
言い返せないでやんの。かーわい～。
「き、着たけど・・・・・一応」
お！やっとかー。どれどれ・・・・・・・・・・・・・・・・・
ガチャリ

ドアを開けるとそこには、黒地に純白のフリルエプロンが取り付けてある所謂メイド服を纏った猫耳のシャムちゃんが。
「・・・

「ギゥーーーー」
「話聞いてたか！？いたたたた！！」
だって可愛いんだもんー。
「み、深雪！服脱がそうとすんな！」
「メイド服は脱がせてなんぼー」
「意味分からん上、その思想はかなり危ういぞ！？」
「うふふふふ・・・・・・」
「う、や、やめろぉぉぉーーーーー！！」

「・・・・・・・・・・・・何やってんだお前等」
ドアに目を向けると、そこにはジュエルと勇気が。
視線はどちらも俺のメイド服。
「・・・・・・失礼しましたぁ」
「ちょ、ちょお待て！！」
いけないものを見てしまったかの様にドアを閉めようとする勇気を必死で止めた。
「深雪にメール貰って来て見れば・・・・・」

今の状況。

俺＝メイド服。
深雪＝俺に抱きついてる、しかも脱がせている。
メイド服＝暴れまくったのでメチャクチャのグシャグシャ（つまり乱れている）。
しかも二人とも風とか使った大バトルを繰り広げたので息は荒いし、顔も赤い。

その上、上記と同じ理由で、なんか汗掻いてる。
そして、俺は目に涙を浮かべている。

・・・

な」
理解してもらってない！！
「その女の子らしい瞳の中でお前は何を映してるんだ！！」
オッケ？じゃねーよ！
「嘘だって、シャム」
ニコッと笑う勇気。その笑みの中には何やら黒い物がありそうだ。
ジュエルに洗脳されたか？
「しっかし、深雪にそんな性癖があるとはなぁ・・・・・・可愛いものを見ると暴れるって有る意味怖えな」
「僕もビックリ。しかも襲っちゃうんでしょ？さっきのアレがそうか」
「ジュエルや勇気を見たときもヤバかったっつってたぞ。特にジュエルん時はもう・・・・・・」
俺とジュエルに同時に萌えていたアイツは半端なく強かった。
そしてそれを正気にできた俺は凄いと思う。
「で？今までに何回襲われた？」
ジュエル・・・・・なぜお前はニヤニヤしてるんだ・・・・・・・・・。
「い、今のを合わせて三回目・・・・・や、四回目か？」
「うわぁ、生々しい数だね」
「そこでなぜ引くんだ、勇気！」
泣いちゃうよ！？
「あれ？そういえば安西さんは？」
「そういえばさっきから居ないな」
「あぁ、深雪なら・・・・・・・・・」
「はーい、お待たせしましたぁ！！」
勢いよく部屋のドアを開けた深雪。
因みに、深雪の部屋の壁には入り口とは違うドアがある。勿論、部屋に繋がっている。どうやら深雪はその部屋に居たようだ。
って事は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「二人に似合いそうな服、探してたら結構時間かかっちゃって」
テヘ、と笑う深雪の格好は・・・メイド服。俺とは違うタイプの、ピンク地の服だ。メイドっつーかロリだな。
そして彼女の手には・・・・・・二着のコスプレらしき服が。
やっぱりか。
今深雪が出てきた部屋には、深雪が作ったｏｒ買ったコスプレ達がドサッと置いてある。つまり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
「えーっとね、勇気君にはこれ」
差し出したのは、絶対アニメかなんかのキャラのコスプレであろうセーラー服。襟とスカートがピンク色って、現実的にはありえんだろ。
「ジュエルさんにはこのとっておきを是非・・・！！」
息を荒くしてジュエルに差し出したのは、ゴスロリって言うのか？そんな服。これもなんかのアニメキャラのやつだろうな。
地が黒い。それに黒と白のフリルが付いている。おっと、リボンも黒いな。中身が真っ黒けなジュエルにぴったりだ。
「・・・・・・・・は？」
ジュエルの顔が驚いている。すぐ分かるほどに。
勇気に関してはもう何をすれば良いのか察した様だ。口元が引き攣っている。
そうだ、その通りだ勇気。
「これを・・・・・どうしろと？」
お、ジュエルも感づいてきてるな。多分その通りだ。
「勿論、着て☆」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ちょ、シャム！？」
「シャム、ヨロ～」
「お前にも俺の苦しみを味あわせてやる」
「酷！！ってシャムひっぱるなって！ちょ、嫌だぁぁぁぁ！！！！！」
全く持って俺と同じ反応だ。
廊下に突き出して無理やり桃色セーラー服を被らせる。
もうこーなったらコイツで鬱憤を晴らしてやるさ！
お、ドアの奥からもジュエルの怒鳴り声が。
フフフ・・・・いい気味だ。別にコイツらは悪くないんだけどな。

そうして、今日は皆でコスプレ大会になったとさ。
因みに深雪はジュエルと勇気を襲い、ジュエルはヒラリとかわしたが、勇気はそのまま押し倒されましたとさ。
さすがに喰われそうになったから俺が助けてやったとさ。

あー、めでたくねぇ。

第十四章：土曜日の午後（後書き）

深雪ちゃん・シャム視点で話してみましたｂｂ

私の趣味を爆走したお話しです。

メイド服って・・・・・良いよね（殴

実を言うと、勇気に着せるのもメイド服にしようと思ってました。

もっと言うと、深雪が着てたタイプの。

で、深雪がセーラー服。あ、その方がしっくりきたかもなぁ・・・・・・。

ま、これはこれで良いか＾＾

今回のものは軽くて書きやすかったです。なんかどんどんジャンルが「ＳＦ」からかけ離れて行ってる気がしてなりません；；

後もう少ししたらＳＦらしいお話しが出てくる・・・・かもしれません（ぇ

第十五章：それぞれの初恋（前書き）

・・・・・・・・と、タイトルに書いてしまいましたが、初恋について語っているのは二人位しかいません。
はい、すいません。
しかもその内の一人も詳しくは語ってません。語っていないに等しい程に。だってだって！タイトル思いつかなかったんだもん！！（言い訳

第十五章：それぞれの初恋

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ンだけどなー」
「うーん・・・・・・・・・・・・・」
場所は学校。目の前には健。しかも困り顔。
どうしたもんかねぇ・・・・・。

話は少しだけ遡り、二十分前の事。

僕は机にへばりついていた。
昨日、ジャンクを二人助けた。「狩る」っていうのはあんまりだから、僕はジャンクを「助ける」と言うことにしている。
僕の×を壊す能力は「狩る」行為とはちょっと違うしね。ま、それは置いといて。
つまり、かなり疲れていた。
この前の奈緒ちゃんだっけ？の時みたいに進化してなかったから良かったけど。

普通から少しはみ出してしまうと思いつつ、話しかけてくる友達を追い払い机に寝そべっていた。
そこに、健が来た。
申し訳ないけれど、眠気の魔王がＭＡＸに降臨していたため追い払おうと思った。
少し顔を上げて見ると、そこには曇った様な表情を浮かべた健が僕を見下ろしてた。天気もなんだか曇っている。
なんか困ってそうだから、話を聞く事にした。ま、親友だしね。

話しを聞く限り、ようはこういう事らしい。
健は、幼馴染の葉咲（はざき）　結菜（ゆいな）って言う人から相談を受けた。
その内容は、健の親友である僕に一目惚れしたらしい。で、間接的に思いを伝えて欲しいと頼んだ。
健は断ったらしいが、あまりにも真剣に、しかもしつこく言われた。とりあえず好きな奴がいるかどうかだけ聞いてくる事になった健は、今こうして僕の目の前にいる、と。

「お前がさ、こんな風に人に頼んで告白とかする奴嫌ってるのは知ってるから気持ちは自分で伝えろとは言ったンだけどなー」
「うーん・・・・・・・・・・・・・」
「やっぱり人づては嫌いだろ？」
「うん」
「だよなー」
なんか卑怯な気がするもん。なんとなくイラッとするし。
「つーかお前、自分の事好きだって思ってる奴がいるって聞かされてんのになんでそんな平然としてるんだ」
「え、これ普通の反応じゃない？」
「あんまりな」
そーかなぁ。僕的には精一杯の普通なんだけど・・・・・。
「僕さ、あんまり『好き』とかそーいう感情よく分かんないんだよね。だからなんとも思わないのかも」
「へー、そりゃまた結菜にとってはショックな情報だな」
健は苦笑いした。
それが『普通』だと思うから、恋とかはしなきゃと思うんだけど、イマイチそういう感情は分かんないんだよね。
家族愛とか友情愛とかは分かるんだけど。
「じゃー、好きな人もいない訳か」

「そーなるねぇ・・・・・」
なんとなく間の抜けた声を出した。
「健はいるの？」
「んー、イマイチいねぇな。俺もそーゆーのはタチに合わないのかも」
「そんな感じだよね」
「・・・・・うん、そうだけどさ。そうなんだけどさ。お前、最近キツくなったよな」
「ん？前からだよ」
「や、なんか元々の毒舌に磨きがかかったっつーか、益々ドス黒くなったっつーか」
ジュエルのせいかな・・・。ヤバいヤバい、普通からどんどんかけ離れてるぞ。
「とりあえず想い人はいねーっつー事で伝えとくわ」
「んー」
想い人・・・・・・・・・・ねぇ？

「・・・・・・・・・・・・って話をしたんだけどさ」
「へー、勇気モテんだな」
シャムが紅茶を啜った。
「モテるって程じゃないとは思うけど」
「あれ？勇気君、ウチの学校の女子にかなり人気だよ？てっきり知ってると思ってたんだけど」
「えぇ！？・・・・何、ウチの学校の女子には包帯フェチでも多いの？」
「「「包帯フェチって・・・・・・・・」」」

安西さんとシャム、ジュエルの声が重なる。
今、僕の家で雑談中。メンバーは僕とジュエルとシャムと安西さん。
つまり、いつもの四人。
最近、二人はよくウチに来るようになった。
話しを聞いたところ、安西さんと二人で居るといつもコスプレだの
アニメだの同人誌だのに巻き込まれるらしく、
シャムはいつもウチを非難所としているようだ。さすがに人ン家で
コスプレはさせないだろうと考えたらしい。
シャムも苦労してるんだなぁ。あのメイド服はキツいだろうし。セ
ーラー服もかなり嫌だったもん。

「それにしても物好きが居るもんだなぁ。こんなのが良いのか」
ジュエルがベッドに寝っころがりながら言った。
「そりゃぁ・・・・勇気の顔は結構なものだぞ?言い寄って来る女
も少なくないだろ」
「「えー、そうか?」」
「ジュエルは分かるとしてなんで勇気まで!?」
だって僕の顔って女顔ってだけで極々普通だし。
「女顔はウケ良いよー?」
安西さんがニッコリと笑う。
「女顔ってあんまり嫌いって言う人いないし、恋愛対象にならない
ってのはあるけど、その姿を見て萌えてる人は不特定多数。
『カッコイイ』と『可愛い』じゃ『可愛い』の方が好きな人多いし。
最近じゃ『ロリショタ』っていう流行もあるしね。それにね・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
スラスラと説明文口調で喋る安西さんを僕達は呆気にとられながら
見ていた。
「深雪はこの手に関してなら二時間は話すぞ。っつーか、話された」

言葉に混じりながら溜息が聞こえた。
「シャム、きっといつか良い事あるって」
「猫、これからはあんまり鞭やんない事にするからさ」
「あんがとよ・・・・」

「それで？猫、お前は何で今日ここに来た？」
「へ？何って、遊びに来たんだが」
シャムがシュークリームへと伸ばした手を止めた。因みに、このシュークリームは昨日メイの家から貰ったものだ。
「それだけか？」
「それ以外に何かあるか？」
ジュエルの顔が少し険しく見えた。が、すぐにいつもの無表情に戻った。
「・・・・そう。なら良い」
浮かせた腰をまたベッドに下ろし、さっきと同じ様に寝そべった。
そういえば、ジュエルってベッドに寝そべってる事多いよなぁ。なんでだろう？
ゴロゴロしてるわけじゃなくて、寝そべってる。
ま、どーでも良いけどさ。

「そういえばー、シャムとジュエルさんは好きな人とかいないの？」
「ぶっ！深雪、いきなり何だよ・・・」
シャムの顔から余裕が無くなった。成程、いるのか。
「なんとなく気になったのー。シャムは別に良いとして、ジュエルさんは？」
「俺の扱い酷くねぇ！？」
「好きな人ねぇ・・・・・・」
ジュエルは相変わらず表情を変えない。
「んー、猫だな」
「「「！！！？」」」

相変わらず顔色一つ変わって無いジュエルの言葉に、一気に顔色を変える僕等。
「え、俺！？」
「えぇぇ！？」
「嘘っ！？」
「うん、嘘」
「「「嘘かよ！！！」」」
ジュエルの表情が変わった。ニヤニヤしてる。・・・・・・・・コンニャロウ。
「なんだ・・・ビックリした」
「大胆告白かと思っちゃいましたー。ジュエルさんお茶目ー」
「お茶目の領域じゃ無いだろ！ったく、俺を巻き込むなよ」
「でも悪い気はしなかっただろ？なー、猫♪」
ん？この口調は訳アリっぽいぞ？
「わ、悪い気とか・・・・そんなんよりも驚きが多かったっつーか・・・ってか俺にふるな！！」
「シャム、顔赤いぞ？」
わぉ、ジュエルがちゃんと「シャム」って言ってる！ニヤニヤしてるけど。
「う、うるせー！！」
「あー、成程ぉ。シャムちゃんの好きな人って・・・・・」
「シャム、極度のマゾだったんだね。近づくな変態」
「ちょ、そこの二人！！誤解だって！そんなの昔の・・・・」
「「昔？昔は好きだったの？」」
「えっと・・・・そ、それはだな、」
何か事実発見だ。や、シャムがジュエルの事好きだったって事じゃなくて。
「シャムを苛めるのって結構楽しいもんだね。新発見だ」
「そっちかよ！？」
だって人の色恋沙汰にはあんまり首突っ込みたく無いタイプだし。

僕って。
「アタシと猫は幼馴染でさ、ちっさい頃からよく遊んでたワケよ」
幼馴染だったのか。知り合いではあると思ってたけど。
「そしたらコイツ、アタシに惚れちゃってねー」
「ジュ・・・・!!!」
「ま、アタシはとっくに気付いてたけどね。面白いから放っといてた」
幼くしてサディスト発揮か。やだなー、そんなお子様。
「で、色々猫で遊んでたらすっかり怖がっちゃって。後遺症で鞭の音を嫌う様に・・・」
「ちょ、それってその頃から鞭使ってたのか!?」
どんな幼児だ!!
「でも鞭の音でビビる猫の姿は可愛いぞ?」
「ジュエル・・・・余計な事をベラベラと・・・・・・・・」
シャムの顔が赤い。昔の話しって結構恥ずかしいからなぁ。
それをみて一層ニヤニヤするジュエル。ドSだぁ・・・・・。
ん?人の事言えないって?僕は口が悪いだけだもん。サディストじゃないもん。きっと違うもん。

「でも、結構ベタな展開だね」
安西さんが伸びをした。
「シャムちゃんらしい恋って言えばらしいかも」
「あー確かに」
シャムってそんな感じする。ベタに生きる人。あ、人じゃないか。
「鞭で引っ叩かれた思い出を背負ってる奴がベタなら、俺は『ベタ』という言葉を破壊する」
「シャム、人には叩いた、叩かれた思い出を一つは持っているんだよ?」
「なに俺を諭そうとしてるのさ、勇気。皆が皆鞭を経験してんだったらこの世も末だ」

なんかノリ悪いなー、シャム。つまんないや。
「つまんないって酷すぎるだろっ！！」
「それだ！そのノリだ！！」
「今、すげー『なんでやねん！』って言いたい！すっげー言いたい！！」
このノリが良いんだよね。これでこそボケがいがある。
あれ？僕って元々はツッコミじゃ無かったっけ？いーや。どうせジュエルとかだとツッコミになっちゃうし。
今のうちボケとこう。
「おま・・・！！勇気・・・・・・・」
「何気に心読むのやめてよ、変態」
「勇気、お前ジュエルに洗脳されたんじゃないか？すっげー傷つく」
「でもシャムちゃん、よく心読むよねぇ？使い魔ってそーゆー能力とかあるの？」
ジュエルは霊から聞いてるって言ってたけど、シャムは見たところ霊は使えなさそうだし。
あ、でも見えるんだろうな。今、シャムの近くに寄って来てた霊を追い払ってたから。
「それは人間達（おまえら）が無防備すぎるだけ。俺達みたいな魔界の奴等はそれなりに直感とか勘が鋭くてな。それに、こっちの奴等はヤバい位考えとか思惑がだだもれなんだよ。ま、俺から見た場合の話だがな」
「へー、じゃあジュエルも？」
「ま、そーゆーこったな。それと、霊を使って奥深いところまで聞き出してるんだ」
「奥深いところって・・・・・なんか嫌ーな感じするんだけど」
「気にするな。それよりいいのか？」
「何が？」
「窓見ろ」
窓の外に目を向けると、星の光る夜空が。

「わっ！！」
「ヤベッ！！」
シャムと安西さんが勢い良く立ち上がった。
「お母さん、怒ってないかなぁ・・・・？」
「心配する前に帰るぞ！」
シャムが安西さんを担いだ。
「あー、猫で良かったわー。じゃなきゃ屋根との間とか飛べなかったもんな。ひっととびで帰るぞ」
「シャムーさっさと進めぇ！」
「また明日なー」
「猫、深雪に変な事すんなよ」
「変な事ってなんだよ！？」
「ジュエルさんと勇気君、ばいばーい」

二人（正確には安西さんを担いだシャム）が宙に舞っては地に堕ちるのを見ながら、なんとなく伸びをした。
「あの二人、結構お似合いだな」
ジュエルが遠いものを見る様な目をしていた。
「そーゆーのよく分かんないけどさ、ジュエルの初恋って誰だったの？」
なんとなく気になった。こんなのが惚れる相手、ちょっと見てみたい。
「お前」
「・・・・はぇ！？」
「うそ」
「じゅ・・・・・・」
「『はぇ！？』だって、かーわいー」
「ジュエル・・・・・・・・・晩ご飯抜きだからな！」
「お前はどっかのお母さんか」
台所の方へ顔を向かせ、赤い顔を隠した。

なんでだろう、顔が赤くなった。暑いからだ。今日はすっごく熱い。
「・・・・・・・初恋ねぇ」
「ん？何か言った？」
「いや！？別に！！！」
「何焦って・・・・・あれ？ジュエル顔赤・・・・・」
「お前もだろ！」
「え、うそ、まだ赤い？」
「・・・・ったく、今日は暑いな」
「そ、そうだね」

暑いんだか熱いんだか分かんないけど、とにかく夏はもう間近だ。
それより、葉咲さんだっけ？の事をどうにかしなきゃ・・・・・。
恋ってめんどくさいなぁ。

ふいにジュエルの方へ顔を向けた。
まだ顔が赤い。頬が紅に染まっているジュエルは、なんとなく可愛かった。
それを見て、顔がまた熱くなるのを感じた。

・・・・・・・・・・・・・・・本当、恋ってめんどくさい。

第十五章：それぞれの初恋（後書き）

甘めでした＾＾あー、自分で書いてて恥ずかしい。
でも、勇気・ジュエル・シャムの赤面と、健の困り顔が書きたくて。
どうしても書きたくて！！

あ、今回のお話しはジュエル×勇気でしたが、だからといってカップリングが決まったわけではありません！
勇気×深雪だって有り得るし！勇気×奈緒ちゃんだっけ？（自分でも忘れてる）も有り得るし！勇気×これから出す新キャラって事も有り得るし！はたまた、シャム×勇気や健×勇気みたいな禁断ロマンスだって・・・・！！
・・・・・はい、ごめんなさい。はしゃぎ過ぎました。つまり、カップリングはまだまだ未知数です。誰ともくっつかない可能性もありますし。
私の中では決まってるんですが。

全く話しが変わりますが、今、考えてる普通少年の新ネタで『性転換モノ』、つまり男女逆転モノを考えてるのですが。最近そうゆう漫画多いのでｂｂジュエル辺りが魔界から適当に性転換できる薬とか調達して貰って。
どうしましょう？そうなると、

勇気＝だいたい今と同じ。女らしさは普通に。
ジュエル＝やっぱり同じ。男らしい口調はやはり普通に。
シャム＝コスプレとかやらされる可哀想な女の子。猫耳。
深雪＝オタクで、コスプレ好きなまったり系男の子。シャムにメイド服を着せては、理性を失い襲う。

・・・・・・うわぁ。男深雪、ただの変人だ。でも一番面白そう（爆

やるかどうかは分かりませんが、とりあえず下書きは書いておこう

と思います＾＾シャムの場合、涙シーンを多くしよう！（笑

第十六章：葉咲結菜（前書き）

やーっと更新出来たぁ！＾＾；
なかなかネタが出なくてダラダラ書いてたらもの凄い時間かかりました；；
困ったときはギャグに頼るのが一番！
・・・・・・・ってワケで、今回はギャグ一筋ですｂｂ
ＳＦどこいったー（笑

第十六章：葉咲結菜

「勇気、悪いんだけどさ、これからウチ来てくんない？」

時は放課後。我は勇気。目の前に居たりは笹本健。

・・・・・・・・・・・・・・・・と、なんとなく昔の物語風に状況説明。

「ん、別に良いけど・・・・なんで？」

「例の結菜の事でさー。アイツが会わせろって煩くてさ」

結菜って言うと・・・・・あぁ、葉咲さんの件か。

「あー、分かった。すっごくめんどくさいし出来ればこのまま家に帰りたいけど、他ならぬ健の頼みだもんね。しょうがないから嫌々行って

あげるよ」

「お前本っっ当に毒舌に磨きがかかったな」

だって日々ジュエルとのイガミ合いだもん。そりゃあ、毒舌だって磨きがかかるさ。

本当に嫌だったけど、どうせいつか葉咲さんに会わなきゃならなそうだし僕達は健の家に向かった。

「健の家に行くのっていつぶりだろう？」
「そういえば中学になってからほとんど遊ばなくなったもんなー。俺達」
「部活で忙しかったしね」
「・・・・・・・・あのさ、前から気になってたんだけど勇気って何部なんだ？」
「バスケ」
「嘘ぉ！？うわ、意外・・・・・まぁビジュアル的にはあってるけど」
「（ビジュアル・・・？）知らなかったの？確か入学して間も無い頃に言ったと思うけど」
因みに、健はサッカー部。イメージ通りというか、なんというか。
「言ってた気もするけど・・・・・っつーか、俺勇気が部活してんの見たこと無い」
「だって週一しかないし。しかも朝」
「だからか。学校のバスケ部がそんなに陰薄いのは」
「僕が入部したての時、顧問が病気してそれからずっとこの状態なんだ。まぁ、もともと週三しか無いんだけどね」
「ほー」
「だからこの部選んだの。楽そうだし。いたってノーマルな部活だし」
とりあえず部活には入っておかないとね。じゃないと普通じゃなくなる。

「健の家にもう居るの？」

「誰が？」
「葉咲さん」
健の家まで後約百メートルの地点で、ふと聞いてみた。
「・・・・・多分、居ないと、思う」
なんでそんなに途切れ途切れ？しかもなんか悟すような口調だな。
「後から来るの？」
「いや、俺は待ってろって言ったんだけどアイツのことだか・・・・・・・・・・・」

ドドドドドドドドッドドドドドッドッ
ドドドドドドドドドドドドドドッドドドドドドドドドドドドドド

「あれ、音が止まった・・・・・？」
それに妙な足音までするぞ？
「勇気、最初に言っておくからな？俺と！結菜は！ただの！幼馴染だっっ！！」
「や、そんなの結構前に聞かされて・・・・・・・」
「あれ？健？」

明らかに僕等二人の声では無いセリフが飛んで来た。
声が飛んで来た方を振返って見ると、そこには割りとおしとやかそうな女の子が居た。極々普通。

「ゆ・・・・・・いな・・・・・・・・・」

「今学校帰り？遅いねー、私なんかずっと前に帰って来たよ？どうせ寄り道とかしてたんでしょー？ふふ・・・・」

あ、この人が今の声の主でさっきの凄まじい音の主・・・・・・・・・・・って。

嘘だぁー。

「え、この人！？さっきの凄まじい音の主、この人！？」
極々普通だよ！？寧ろ女の子らしいよ！僕がここ最近関わってきた女の子の中で一番女の子らしい態度をとってるよ！？
あ、これは比較対象が悪いのかな。うん。誰と比較したかは伏せと

こう。言わなくても分かるだろうから。

「あ、健のお友達？私は健の幼馴染の・・・・・・」

「結菜」

「ん？なぁに？」

「気持ち悪い」

「コラ！レディーに向かって失礼よ！」

「勇気には全部言ってある。さっきの爆走音も聞こえた」

「・・・・・・

健が葉咲さんの頭をスパーンと叩いた。
なんかさっきと雰囲気はあまり変わんないけど・・・・・・・・。
でも、一つだけ分かる。、この人も普通じゃ無いんだなぁ。
秒速十メートル・・・・・・地味にめちゃくちゃ早いな・・・・・・・・。

「あぁ？てめぇは黙ってろや、カス！」
「ほんとに落ち着け」
健のゲンコツが葉咲さんの頭に落ちた。うわぁ痛そ・・・・・。

「えーっと、勇気。これが例のお前に一目惚れした葉咲結菜。んで、結菜。言うまでも無いが、これが・・・・」
「斉藤勇気君。身長１５７センチ、体重４５キロ、Ｂ型、１１月９日生まれ、さそり座、バスケ部。家族構成は・・・・」
「え、なんでそんなに知って・・・・？」
今日会ったばかりなのにここまで知られてるとなんか怖いよぅ。
「ん？あー、ほら！ウチの学校って生徒の個人情報は全部校長のパソコンの中に入ってるじゃない？」
「へ？そうなの？」
「なんかそうらしいぞ？この前担任が言ってた」
「うん、だから校長のパソコンを見せてもらって、それで色々仕入れたの」
「よ、よく見せてもらえたね・・・？」
「あはは、まさかー！言って見せてもらえるわけないじゃん！」

え、じゃあ何・・・・・・って健。僕の肩に置いてるその手はなんだい？
まるで『それ以上立ち入るな、ただでは帰れないぞ』みたいな顔して。
なんか危なそうだけど、これは聞かなきゃいけない気がする。じゃないと作者が欲求不満になってしまいそうな気がする。

「えっと・・・・じゃあどうやって？」
踏み入れました。怖いけど「危険！立ち入り禁止」の向こう側を踏みました。
健、そんな凄い顔しないで。こうでもしないと作者的には話が進まないんだってさ。
「んー、校長も色々頑張ってたんだけどね。情報にロックかけてたり、パソコン自体にもロックしてたり」
やっぱ聞かなきゃよかったかも。
「結菜・・・・・とりあえず結論を言え」
健、なんか言葉に溜息が混じってますことよ？

「ん？まぁ簡単に言うとですね。校長のパソコンちょいちょい～っといじって、勇気君のデータ盗んだ」

神様、なんで僕の周りに居る女子は

こんなに普通じゃない方ばかりなのでしょうか？

ん？『そうじゃないと面白く無いから』？

そうですか。

第十六章：葉咲結菜（後書き）

微妙に続きます～。

本当は結菜ちゃん編は一話で終わらせて、次話からちょっと新たな展開にするつもりだったのですが、思ったより長くなってしまいまして＾＾；

あれだな。バスケ部の下りが長かった（爆

あ、性転換モノの下書き、全然進めてません＾＾（ニッコリ

なぜか今「もし普通少年のキャラが家族だったら・・・」という感じの話を書いてます（ぇ

あれですね。キャラを好き勝手させるのは楽しいｗｗ

第十七章：キレました☆ｖｏｒ２（前書き）

ＴＥＳＵＴＯが終わりましたーーー！！！
やった！やった！
小説の更新も再開です～＾＾ｂ

バンバン書くぞーーーーー！！！！

第十七章：キレました☆ｖｏｒ２

今、僕はどんな顔をしているのだろうか？
いや、なんとなく分かるけど。
きっと、犯罪現場を見てしまったいたいけな少年の様な顔をしてるだろう。

それとほとんど同じ状況だしね。

「結菜・・・・・・・これで何回目だ？」
「ん？学校（うち）のパソコンいじくったのは六・・・八・・・あ、丁度十回目かしら？」

十回！？よく捕まんなかったなぁ・・・・。

「他」
「そんなの覚えてるわけ無いじゃないー☆」

なんなんだ、この漫才の様なやりとりは。
とりあえず普通じゃない。
あぁ、さっきの健の「俺とアイツはただの他人」宣言はこのためか。

「俺のデータまで見て無いだろうな・・・」
「健の見たってなんのメリットにもならないじゃない？リスク犯して見る程でも、ね？」
「うわっ！なんか安心したけどムカつくっっ！」
「えーっと、お取り込み中みたいなんで僕はこれで・・・」

「「ちょっと待てぇーい！！」」

ち・・・・やっぱりこの状況じゃ逃げられないか・・・・・。

「・・・・・・・って事で、勇気。これが俺のただの奇人幼馴染、葉咲結菜。悪い事は言わないから関わるな、って言いたいところだけど

もう目ぇ付けられちゃってるしな。ご愁傷様。南無南無」

「ペットは飼い主に似るって言うよね。つまり近くにいる者同士はどうしても似ちゃうもんなんだよね。つまり健も奇人だったんだ？へー・・・近づくな異人」

「あ、勇気怒った？ご愁傷様って言ったの怒った？それとも南無南無？」

「ここで怒るべきなのは私だと思うんですけどねー・・・ふふふ、奇人かぁ」

「おい、なんで俺の『奇人』には怒って、勇気の『異人』には無反応なんだ」

「異人なんて素敵な響きじゃない・・・！！勇気くんらしいユーモラスな言霊だわ」

「どうも」

「ここまで完璧な差別受けたの初めてだ、俺」

なんか僕まで会話が漫才っぽくなってきたな・・・。あ、この小説の会話文は元からそうか。

「お、結構暗くなってきたなー」

空を見上げると、夕焼けはもう終わりかけ、夜の空になり始めていた。

「勇気、お前時間大丈夫か？」

「え？あぁ・・・・」

帰ってご飯作らなきゃ。

ちょっとでも遅くなるとジュエル煩いんだもん。

第一、この状況を早く抜け出したい。

さっきから健と葉咲さんのボケとツッコミのエンドレス。

それに巻き込まれる僕の身にもなれってんだ。

・・・・・・まぁ、見てて結構面白いけど。

「勇気くん、帰っちゃうの？」

「え？あ、うん。そろそろ・・・・」

よし！これで逃げられそうだ！！

なんか葉咲さんがこの世の終わりの様な顔でこっちを見てるけど気にするもんか。

自分が第一！　鬼？悪魔？人でなし？　ふん、それで結構！！

邪魔さえ入らなければもう帰れる。

そう、邪魔さえ入らばけれ・・・・・・

「あれれ？勇気君ー？」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ば、帰れたのに、ねぇ？

「安西さん？」
「あ、やっぱり勇気君かー。勇気くんの家ってこっち方面じゃないよねぇ？」
「ちょっと友達と話してて・・・・安西さんは？」

安西さんの家もこっちの方面では無いはずだ。

「私？私はねぇ・・・・・フフフ、超！大人気コミックス『ばじるそーすで召し上がれ☆』の最新刊を買ってきたのでぇす！！」

安西さんが頭に掲げたのは、絶対に一冊以上は本が入ってあるだろう、パンパンになった書店のレジ袋（って言うのかな？）だった。

「あー、それ今日発売なんだっけ」
「そー！だから家に帰った途端制服も着替えずに本屋さん行って買ってきたのー。で、ついでに目に付いた同人誌も多々・・・」
「だからか。そんなに袋が破裂ギリギリなのは」
「えへへ。『ばじそー』買ったら帰ろうと思ったんだけどね～。好みなアンソロジーの新刊の表紙がめちゃくちゃ可愛くて」

安西さん、そちらの専門用語は通じない方々もたくさんいらっしゃるから。

例を挙げれば、僕の頭の上に腕を乗っけてる健。「全く意味が分からない」といったご様子ですよ？

「えーっと、漫画の話？」

「うん、まぁ」

「あ、笹本くんも読んでみる？面白いよー。ね、勇気君」

あえてそこで僕にふりますか。

「うーん、面白いっちゃ面白いけどさぁ」

「何、勇気も読んでるのか？」

「・・・・・・・・・・安西さんに無理やり薦められてさ・・・」

「でも全巻読み終わったでしょー？いやー、さすがにうちの弟には薦められないからさ。少女漫画」

「え、それ少女漫画？」

健の声がなんか僕の身体のどっかに刺さっていく気がする。

「少女漫画・・・・読んでるのか？勇気」

「・・・・・いや、だから安西さんの薦めで・・・」

「最新刊、見終わったら貸すからねー」

安西さん、なんでこのタイミングでそれを言うのですか。
だから最後まで読むのを拒んだんだ！！知られたら絶対こんな風になるって分かってたし！！

「・・・

な、なんか葉咲さんの後ろの殺気がもっと大きく、濃くなっていくぅ！

「あのさ、安西さん・・・・・」

「あ、そういえば前から思ってたんだけどさ、『安西さん』って固っ苦しいよ」

「え、じゃあ・・・・・『深雪』？」

ゥゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

ちょ、もっと大きくなったってば！！どうするよ、これ！

「あ、良いね、それ。じゃあ、勇気くんも『勇気』かなぁ？」

「まぁ、ジュエルにもそう呼ばれてるし別に良いけど・・・」

「じゅ・・・・・・える？」

ゴフアッッッッッッ

葉咲サンノ殺気ガ

溢レ出シタ

ドウスル？

△逃ゲル
△ズラカル
△脱走スル

よし、全部の選択肢が逃走だ！闘争じゃないぞ！逃走だ！
逃げるが勝ち！！
勢いつけて、ダーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッシュ！
！！！

「お、勇気発見～」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんで今日はこうも
邪魔が入るんだ。

「あ、ジュエルさん～今日もお美しいー」
「ジュエル・・・・」
「ん？勇気達の知り合いか？」
「これが・・・・・・じゅえる？」
「なんでこんな時に・・・・・って、え？」

ジュエルみたいな使い魔は、普通の化け物達と違って霊力が強い。
だから、霊力が高い人なら結構ハッキリと見える。
けど、それはあくまで霊力の高い人の場合。
見たところ、葉咲さんと健はそんなに霊力は高く無い。ていうか、ほとんど無いに近い。

なのに、なんで見えるんだ？

「それはアタシが現世でも一つの固体として存在することが出来る、云わば『きぐるみ』みたいなもんを被ってるからだ」
「また読心！？」
「あー、そういえばシャムちゃんもときどきそんな風に実体化して、学校とかに遊びにきたりしてたなぁ」
「え、シャムもそんな事するの？」
「んー。ああ見えてシャムちゃんも結構いたずらっ子のわんぱく坊やだから」

意外だー。ただのベタじゃなかったのかー。

「勇気、知り合いか？」
「あー・・・・えっと・・・・」
「勇気の従姉のジュエルです。いつも勇気がお世話になってます」
「って、うぉい！何勝手に嘘ついて・・・・」
「あー、なるほど！確かに美形なとことかそっくりっすねー」

健、騙されてるし・・・。
しかもいつもよりニコニコしてて、やけに猫かぶってる。

「あ、勇気。今日、ちょっとむこうに帰る用事があってな。メシは

いらん。明日の夜には帰ってくる」
「え？あー分かった」
「ど、どどどど同棲！！！？」

また葉咲さんが何かを叫び始めた。
まぁ、実質的にはそうなるけどさぁ・・・。

「うふふ、同棲なんてものじゃないわよ？ちょっとこっちの方の高校に用事があったから、その間泊めさせて貰ってるだけなの」
「だってさ。だから落ち着け、結菜」
「健は黙ってて・・・・・。従姉同士は結婚だって出来るのよ！？」

何を言いだすんだ、この人達は・・・・。
ジュエルもよくこんな嘘っぱちがスラスラと出てくるもんだよ。

「あ、もう行かなきゃ。じゃあね、勇気、深雪、お友達の皆さん」

ジュエルが僕の肩に手を置いた。

やっと災厄が去る・・・。もう葉咲さんの背後のどす黒いオーラが爆発寸前だよ。
これで僕も帰れば一件落着だ・・・・・・・・・・・・と、僕は思っていた。

僕の身体が引き寄せられた。多分ジュエルだ。肩に乗っている手に力がこもっているのが分かる。
そんな事を考えてると、頬に何かが触れた。

なんだろう？

振り向いて見ると、そこには結構ドアップなジュエルの整った顔。

えーっと。

こんなに顔が近いって事は、多分ジュエルの唇が当たったんだな。
距離感が、なんかそんな感じだ。

「頬にキスをした後」って感じの距離。そうだ、まさしくそれだ。

って事は僕、キスされたのかな？

ま、別に頬にキスなんて外国じゃ挨拶みたいなもんだし。どうって事ないけどさ。

ただ、僕の目の前にいる人物にとっては、どうって事ありそうだ。

ぶごごご

「あ、私ももう帰んなきゃー。シャムちゃんが『ばじそー』を待っている～」

気のせいか、今、どこからかシャムの様な声で「適当な事言うな！」っていうツッコミが聞こえた気がする。

「えっと、葉咲さんばいばい！！また今度！」

「ばいばいー笹本くんと葉咲さん～。あ、あと勇気・・・」

安西さんが僕の腕をぐいっと引っ張る。

頬が、唇の様なものが当たるのを感じ取った。

振り向くと、ニコッと微笑んでいる安西さんの顔のアップ。

うわぁ、デジャヴ。

「じゃ、ばいばい～愛しの勇気♪」

「ちょ、安西さ・・・・」

「安西さんじゃなくて深雪！」

「え、あ、深雪・・・・・・・ってそうじゃなくて！」

たたた～っとかけていく深雪。

「ちょっと待てぃぃぃ！！！！！！」

そんな事を叫びながら深雪を凄まじいスピードで追いかけていった葉咲さん。

取り残された、僕と健。

「勇気・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・お前も大変だな」
「健ほどじゃないよ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「はは、そうだな・・・。あれはもう化け物の領域だからな」
「まぁ僕の周りの奴等もそんな感じだけどね」

実質、そうだし。

「あのさ、健。今日僕ん家誰もいないからさ、うちでご飯食べない？愚痴をおかずにしながら」
「おー、俺も今勇気誘おうと思ったところだ」
「なんか無性に色々愚痴りたくなってきた」
「俺も」
「そうだ、そこのコンビニでなんか飲み物とお菓子買ってこうか」
「パーティー気分だな、あはは・・・・」

その夜、僕達は多分一生分くらいの、女の子についての愚痴を言い合いました。
とてもスッキリしました。なんか肩が軽くなった気分です。
同じ苦しみを味わっている友達って、良いなぁと、改めて実感しました。

健とは、また長い付き合いになりそうです　まる

第十七章：キレました☆ｖｏｒ２（後書き）

ラブ要素満載なのに、色気が全く出てこないのがこの章の凄いところ＾＾（爆

前々回の方が寧ろ執筆していてこそばゆかったです。

今回キレて貰ったのは結菜ちゃん。

ジュエルと深雪に遊ばれましたｗｗ

いち早く「この子が勇気に惚れてる葉咲さんか…」と察知し、いち早くいぢめちゃいました＾＾

でも、結局のところ一番の被害者は勇気と健ですね。

二人とも精神的にやられてしまいました（笑

可哀そーにｗｗｗ

第十八章：じゅうにさい

今日も普通だ。

昨日の健との愚痴り大会の後、僕等はこれまでにもない清々しい顔で別れを告げ、僕は静かな眠りに着き、今日、いつもと違ってジュエル
に叩き起こされることなく、爽やかな朝を迎えた。

そして、普段通り学校へ行った。昨日、あれから深雪の家まで追いかけて行き壮絶なバトルを繰り広げていた葉咲さんを止めに行き、疲れ果てていた健を慰め、タニシの長話を聞き、無事に帰路へ着いた。

・・・・・・・あれ、なんか普通じゃない気がしてきた。

因みに、葉咲さんはこの世の者ではつくる事は出来ないであろう、般若の如き顔で深雪に何やら凄まじい技をかけていたらしい。
で、当の深雪は、漫画を熟読しながら適当に葉咲さんの技を受け流していたそうだ。
そんな二人の姿を直に見た健は、軽い女子恐怖症に陥っていた。慰めるのに大変だったのなんの・・・。

とにかく、今日は平和だった。

科学的根拠のない事も起きなかったし、第一、今日はジュエルがいない。
凄く普通。ふつうの男子中学生の生活風景だ。

あ、でも夜くらいにはジュエル帰って来るんだっけ。ご飯、何にしようかなぁ。
確か「スーパー特一」でジャガイモと牛肉が安売りしてたはず。じゃあ、今日は肉じゃがかな。
人参は家にまだあるから、インゲンと・・・あ、シラタキも買ってこうっと。

「うわぁ、まんま主婦だな、勇気」
「ム・・・しょうがないじゃん。だって小さい頃から母さん居ないこと多かっ・・・た・・・し？」
「よ」
「うわぁ！！シャム、いつから居たのさ！」

隣にシャムが居た。
し、自然に話しかけてくるからこっちもナチュラルに会話しちゃったじゃないか。

「しかも心読まないでよ」
「だって思考が漏れてたし？つーかお前ばけもん使いなんだから俺の気配も読み取れっての」
指で額を弾かれた。デコピンって地味に凄く痛い。

「いたた・・・。だっていちいち思考の外漏れを制御するのってめんどくさいもん。それに、シャムの気配ってなんか読みとりずらいの」

そこら辺ウヨウヨしてる霊とかと紛れてて。

「まぁ俺は気配を消すことに関してはプロ並だからな」

「それって陰が薄いって言うんじゃないか？」

「うるせーやい。んで、本題なんだけど」

なんだ、ちゃんと様あって話しかけてきたのか。てっきり暇だったのかと思った。

「・・・あのな、俺もそこまで暇じゃないんだぞ？それでだ、ジュエルの事だが」

「ん？あの顔は良いくせに喋り方は男らしくて、俺様で女王様で暴力的なジュエルがどうしたの？」

「あぁ、あの顔は良いくせにあの喋り口調のせいか年の割に全く色気が無い、高慢でサドでアホなジュエルなんだが」

悪口じゃないよ。ただジュエルの特徴を分かりやすく説明してみただけだよ、うん。

「アイツ、最近おかしくなかったか？」

「ジュエルが？特にそんなことなかったけど・・・・あ、時々なんか考えごとしてるみたいだよ？」

「考え事？」

「んー、夕方とか外に出ると、なんか遠くを見てボーッとしてるんだ。すぐあの性格に戻るけど」

まぁ、女の子は雨や夕焼けを見るとメランコリックな気分になるとか母さんや姉さんが言ってたし。
だから、特に気にはとめてなかったけどなぁ。

「そっかー・・・やっぱ気にしてんのかな、アイツ」
「何を？」
「んー、教えて欲しいか？」

シャムの顔が意地悪そうな笑みに象られた。

「いや、特に」
「・・・・・お前、元からそんなドライな性格なのか？」
「うん、多分」
「そんなんで友達ちゃんといんのかぁ？」
「とりあえず必要なくらいは」
「・・・・・必要なくらいってなんだよ」
「必要なくらいの。情報収集とか、物の貸し借りとかに困らないくらいの。あと、絡まれると厄介な奴とか。先に顔見知りになっといて、変に問題にならないようにしとくのさ」
「中学生男子がなんつー友達関係の計算をしてんだよ。青春しとけよ、青春」
「そんなもの良い思い出にしかなんないじゃん。全てがこの後のメリットとデメリットで分別されるんだよ」
「怖いなー・・・」

本当のことだもん。

でも、一人だけ違う。
健・・・笹本健はこの後のこととか、めんどくさいの全部抜きで、友達だ。
言うならば、精神的の「メリット」を得るために、の、友達だ。

「なんだ、充分青春してんじゃん」
「・・・・・人の心読まないでよ」
「親友なんて一人いれば充分だからなー。お、勇気顔赤くなってやんのー♪だったら思考読まれないように制御しとけっての」
忘れてたんだもん・・・・。
てゆーか、僕顔赤くなってる!?

「ま、話は凄くずれたんだが」
ホントだよ。
「ジュエルがなんか悩んでることは分かった。とりあえずアイツに「気にするな」とでも言っといてやれ」
「ねぇシャム、やっぱりさっきの教えて」
「お、聞きたいか?」

「うん」
「・・・・・・・こう、いつも素直なら可愛いんだけどな、お前」
「僕男なんだけど。可愛いとか言わないでくれる？気持ち悪い」
「俺もこんな風にきっぱり言えば深雪もちゃんと分かってくれんのかなー」
「ねぇ、また話それてる。早く話してよ。じゃないと魔界の色々を呼び寄せるよ？」
「それが人にものを頼む態度なのかぁ・・・？ま、いいや。教えてやる」
多分、こういう風にすぐに折れちゃうとこがシャムが深雪になめられる原因なんだろうね。
「あのな、ジュエルは・・・・・・・

「じゅ、ジュエル！？」
「いきなり出てくんなよ！！」
さ、最近の使い魔は心臓に悪い登場をするのが流行りなのか？
なんか寿命が縮んだ気がする・・・。
「大袈裟だな」
「五月蝿い！てゆーかジュエル、帰ってくるの今日の夜じゃなかったの！？」
「あぁ、思ったより早く用が済んでな。ジュエル様のお帰りだぞ、嬉しいだろ？」
「何も俺達の前に現われることないだろ・・・。勇気ン家行ってろよ・・・・・」
「行こうとしたらお前等に会ったんだ。で？アタシがなんだって？猫」
「え、えーっと・・・・・」
空の青がだんだん消え失せ、赤と化していた。しかしシャムの顔は青かった。
「怪しいな・・・・勇気、なんの話をしてたんだ」
「さぁ？ただ、シャムがジュエルの最近の様子を聞いてただけ」
「アタシの様子・・・？」
「うん、悩んでるがなんとかかんとかって」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
黙り込んだジュエルの黒髪が風に揺れる。
「シャム、アタシはあんなのどうでも良いと思っている」
「いや、でもよぉ・・・・・・・・」

「アタシはアタシだ。天界の歴史なんてしったこっちゃない。今は今、だ」
「それは俺だって思ってるさ。でも、それでも天界の奴等達は違うだろ・・・？」
話が全く分からないが、とりあえず深刻な空気なのは確かだ。
こういうとき、どっか行ってた方がいいのかなぁ？
「ま、気にする事はないだろ。アタシはそんなに弱くない。だろ？」
「「それはよぉ～く存じております」」
あ、僕もつい口出ししちゃった。
「だからいっちょまえに心配なんてすんなよ、シャム」
「そりゃ心配はするけどさ。とりあえずまだまだガキなんだし。なにより俺より年下だしな、お前」

「え、そうなの？」
「なんだ、知らなかったのか、勇気」
「そう言えば勇気達には俺等の年とか言ってないもんなぁ」
態度とかそんなんで、絶対同い年かジュエルの方が年上かと思ってた。
つーかシャム、立場弱っ！　・・・・・って、今頃か。
「ジュエル達っていくつなの・・・・？」

「俺は十七。ま、人間から見ればの話だけどな」
「あー、そんな感じしたよ、シャムは。やっぱりベタだね」
「あはは、泣いて良い？」
「ジュエルは？」
「スルーですか」
「ん・・・・・・・・・・・・とだな・・・・・・・・・」

ジュエルが珍しくお茶を濁すような喋り方をした。
いや、ホント珍しい。
いつもあんなに無駄にキッパリハッキリ言う奴が。

「あー・・・・・・・・・・・・・十二だ」
「ふぅん・・・・・・・・・・・ってえぇぇ！？」

嘘だ！！絶対そんな訳ない！
十二歳って、僕より二歳も年下なんだよ！？

「いや、人間で言う身体年齢の事だからな！実際、魔界ではもうちょっと年食ってるんだが・・・・・・・・まぁ、身体年齢で見ると・・・・・・十二だ」
「嘘だぁ・・・・・え、だって身長とかも僕より高いよ・・・？」
「なー、ぜってー十五以上には見えるだろ？すくすく育ちやがってなー、コイツ」
「いや、だから実際はもっと年上だ！！これはあくまで人間と同じ年齢の増し方をしたなら、の架空の設定であってな、」
「ふーん・・・・年下かぁ・・・・・・・」
「あのな、勇気。よく考えて見ろ、生まれてからの月日の長短ではアタシの方が長いんだからな？だから決して年下とかでは・・・」
「でも人間と同じ年齢の増し方をしたなら、年下なんでしょ？」
「いや、だからな、それはあくまで架空の計算であって、アタシは

魔界人・・・・」
「どこで生まれたであろうと、今君が居るこの空間は人間の住む現世だから・・・・ね？」
いやー、人間って不思議だね。
年下って分かっただけで、なんかジュエル弱々しく、可愛らしく思えて来たよ。

あー・・・・・・・アタシだ。ジュエルだ。
今、アタシの前には、すっごい柔らかい笑みを浮かべながら、赤黒いオーラを後ろから噴射している奴が立っている。
どうやって出すんだよ、そんな赤黒なんてオーラ・・・・。

「へー・・・十二ねぇ・・・・・・」
「いや、だから、それは」
「そーだなー、確かに勇気の腹黒さはジュエルの凶暴横暴さとほぼ互角だもんなー。それに年齢差もプラスすれば結構・・・」
「猫！五月蝿い！！てめぇはさっさと深雪ンとこでも行きやがれ！」
「ひでぇ！」
「ジュエルぅ、目上の人にそんな言い方しちゃダメだろう？」
「く・・・・・第一年下じゃねぇっつってんだろ！その宥める様な口調やめろ」
「あっはっは、ジュエル馬鹿だからなー。これは勇気の形勢逆転かぁ？」

プチン

「・・・・・・・・るせぇっつってんだろ・・・・・・・・・・・・」

アタシが懐から出したもの。

銃。

「・・・・・・・・・・・・ぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「ちょ、銃！？おい、銃刀法違反！」

「元はと言えば猫のせいだからな・・・・・・まずお前だ」

「え、ま、待て！それ・・・・」

「あぁ、この銃は魔界(あっち)で出た最新作だ」

「お、落ち着け！！どうせまた、まともな沙汰じゃないんだろ！？」

「当たり前」

「ちょ、や、ヤメロォォ！！」

勇気はアタシ達の会話がよく汲み取れずにいる。

まぁ、数分後には分かるだろ。

ズガンッッ

銃声と共に、銃口から飛び出した緑の何かがシャムに命中した。

「う、うわぁ！！ちょ、動けねぇ！」

「当たり前だ。あっちの科学者達が仕事もしねぇで作りあげた一品らしいからな」

「何やってんだよ、科学班！！」

「これ・・・・何？」

勇気が目を丸めて猫を見つめている。

「ふ、これは今、魔界で警察を騒がせてる如何様銃（フロウド・ガン）だ。銃口から、弾の変わりに緑のスライム状の物体が出てきてな、相手の動きを封じるのさ。強盗には最適だぞ？なんせ銃刀法にひっかからないからな」

ま、それでも捕まるけどな。

それにしても・・・・・・エロいなー、この銃。

スライムっつーか、なんかドロドロした液体みたいの出てきたぞ、これ。

地面に張り付いてもがく猫の姿・・・・・・・・・・・・深雪に見せたら喜ぶかもな。

よし、後で写真撮っておこう。

「へー、なるほどー・・・・ってなんでそんな物が今ここにあるのさ

！？」
「知り合いの科学者に貰ったンだよ」
「ゆ、勇気、そんな事より早く助け・・・」
「じゃあ、次勇気だ」
「ご、ゴメンってば！！さっきはちょっと遊びすぎた！ゴメンなさい！」
「ゴメンですめば死刑はいらねーんだよ・・・」
「死刑！？死刑って！？」
「ふ・・・・歯ぁ食い縛っとけ」
「え、ちょ、えぇぇぇえ！？」

「あれぇ、皆お揃いでぇ？」

「「み、深雪ぃ・・・・」」
「あらら、二人ともエロエロな格好で～♪」
「「！？」」
「だろ？」

いい所に深雪が来てくれた。
丁度勇気もドロドロの刑に処した所だったからな。

「・・・・・・・て、ワケでな、ちょっと罰を与えたわけだ」
「・・・・・・・・・・・十二歳・・・？」
「え、ま、まぁな」

「年下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ちょ、深雪！？」
「いいぞ・・・・・・深雪やっちまえ・・・・・・」
「猫！？」
「あー、そうそう、そことそこを切断して・・・・・・あ、そこもっと右・・・・お、結構楽になった」
「勇気は何して・・・・って霊！？霊使ってスライムから抜け出しやがったな！」
「何の為に化け物が操られると思ってんの」
少なくとも、この為ではないだろ！？
「年下・・・・・・ロリ・・・・・・・・・・かぅあぅいいいいいーーー

母親かっての。

画面の前の皆の者、アタシが一つ忠告しといてやる。

よーく聞いとけ。

自分の年は、むやみに人に曝すもんじゃねぇぞ。

じゃないと、こうなるからな。

第十八章：じゅうにさい（後書き）

ちょっと長くなってしまいました；；

今回は、趣味に走りつつ、これからの物語のプロローグ的要素を詰め込んでみました。
ジュエルの秘密、本当は今回書いとこうと思ったのですが、まだ早いかなぁ、と。
もう暫くしたら明かしましょう＾＾

材料は大体揃いました。
さぁ、新展開の幕開け・・・・・になると良いなぁ（ぇ

お知らせ

えー、あんず飴です。お久しぶりです。…うわぁ、ほんと久しぶりだ。

長い事更新がストップしてまして、驚いた方、呆れた方、「あ、更新ストップしてたんだ、気付かなかったぜベイビー」な方、

まっっことにすみませんでした！！

あぁ、石を投げないで下さいっ！！　トマトも投げないで下さいっ！！　結構トマト嫌いなんです！！（ぇ

更新停止にはちゃんとした理由があるのですよ…フフフ…。

ぶっちゃけますと。持病が悪化しました。

勿論理由はそれだけじゃないんですがね？

この小説、「普通少年」は半分考えて半分その場で適当に、な感じで毎回執筆していました。

そんなある日、『はてさて…このままいったら訳の分からない小説になるのでは…？』という一抹の不安にかられました。

今でも、結構最初に考えたストーリーから結構かけはなれてたんですよ、全くダメですねー。

このまま書き進めていこうかとも思いましたが、その後考えていた展開になかなか持っていけない、という事に気が付きまして。

ううむ、一体どうしたら良いだろう…。これでは読み手にも伝わりにくい小説の見本が完成してしまうな…。

そんな事を考えて、刻々と時間が過ぎていきました。

『そういえば、評価で「記号の使い方が見にくい」などのアドバイスも貰っていたなぁ…』

そして数日前。ついに結論が出ました。…というわけで！！

企画「この際小説達を大掃除しちゃおうよ計画」大実施！！！

様は、大幅な修正です。

一から全て書き直し、土台はそのままで少し調整していこうと思います。

この「普通少年」だけではなく、もう一方のエッセイも修正していこうと思ってます。

少々時間はかかりますが、今度こそ計画的に…。そう、計画的に…！

今回は、その事を知らせるために書きました。

誠に勝手なのですが、作者的には長い間考えた結果なのです。

「はっ、もう付き会ってらんねーよ！」な方、どうかそのまま放っぽってやって下さい！

「暇だから気が向いたら見にきてやるよ」な方、出来るものなら金一封を差し上げたい（笑

明日から、一週間後に第一章の編集、その一週間後に第二章…という感じで大掃除を進めていきたいと思ってます。

修正したものは最後の後書き部分に「修正済」という文字を貼り付けておきます。

少々話を付け足したり削ったりしちゃいますが、基本同じ作者が書いた同じ物語なのでご心配なく。

既章、全て修正し終わったら、この「お知らせ」は最新章に早変わりします！！

それでは、また最新章でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2324e/

ｕｓｕａｌｌｙ　ｂｏｙ　－普通少年－

2010年10月13日14時22分発行